
迷宮の錬金術商店

黒兎と満月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷宮の錬金術商店

【Nコード】

N8300W

【作者名】

黒兎と満月

【あらすじ】

過去に何かを抱えるサラリーマンだった主人公が異世界に飛ばされ、異世界の人族を能力を使い繁栄を支援する使命を受けて新たな世界で生きる生産チート系ファンタジーです。

相棒の美少女狼と世界を旅し迷宮や街で探索者を相手にお店をしたり冒険したり。

不老不死の身体になっても痛いのは嫌な主人公は、慎重に迷宮を探索し錬金材料を集め成長し頑張って使命達成を目指す！。

主人公補正があったりパロディー、少々残酷な表現を含みます。

初めての創作作品で稚拙で読みにくい点もありますが、多くの皆様に読んで頂き感謝してます。まさかのお気に入り1000越えで動揺が隠せない作品になりました。

評価や感想を貰い頑張ってますので宜しくお願いします。

第1章

はじめりと下準備

1話

（前書き）

はじめまして、稚拙な処女作ですがヨロシクお願いします。
多くの方に読んで頂いており恐縮しています。

感想でご指摘いただいた所を少し加筆修正して差し替えさせていただきます。
力不足の故にグダグダになれば、またご指摘ください。
今後ともよろしくお願いいたします。

第1章 はじまりと下準備 1話

地下鉄から街へ出ようと階段を上がっていたはずが、気付けば自分が居るのは広大な草原であった。

生きて来た29年の中で一度も観た事も無い、圧倒的な自然に腰が引け、無力感が悪夢に思えて来る。

思えば後半年もすれば30代目前の俺には、何も特別な事などほとんど無い日常と仕事、人より恥の多い人生を打算的に送る平凡なサラリーマン暮らしだった。

そんな俺に訪れたのは、ありえない出来事だった、突然に胸の奥に秘めていた望みを叶えると言われ、連れて来られたのは剣と魔法に魔物と迷宮の在る世界。

突然の接触と簡単な説明の後に刻まれた情報は、脳内に膨大な量の知識と使命感をもたらし、ひどい頭痛と混乱を連れて来る。

混乱が続く中思うのは、転移召還や転生に憧れはあったし、ファンタジー系統のRPGゲームも小説も映画も好きだったが、まさか現実になるとは。

今理解できるのは、この世界「セフィラム」と呼ばれる世界で、自分に与えられた使命と内容のみ。

与えられた能力は何故か自然と納得し理解できたが、使い方も解らない状況だ。

「どうこれから生きてゆけばいいのだよ。」と呟き今日のいつもと変わらない休日の朝に思考を飛ばす。

夏も終わり何度かの台風も例年と変わらず過ぎて、日中は暑く夜には肌寒くなってきた夏と秋の入り混じったそんな季節は特に仕事が多忙しくて。

仕事に追われる身の俺には休日だけが待ち遠しい。

就職して沢山あった趣味もほとんどなくし、友達とも付き合いも疎遠になった。

日常に潤いを与えてくれる彼女が居た事もあったが、本気にならない自分では長くは続くはずもなく、一時の孤独を癒すモノでしかなかった。

残った俺の楽しみは少ないが、街に出れば何か興味を引くものには困らず、気の向くままユツクリと一日を楽しむ事ができる。

そんな俺のありふれた休日を今日も過ごす予定で、身支度を終え住み慣れた広めのワンルームマンションを出て、いつもの駅から電車に乗り目的の繁華街へと向かう。

休日の朝の車内は空いていて、通勤では座る事も出来ないが余裕のある座席に腰を掛けると到着まで短い睡眠を取ろうと思い、心地よい揺れに身を委ね瞼をとじた。

「・・・・・・・・」

静寂に満る闇の中で、微かに何かが聞こえる。

体に浮遊感を感じ、これは夢だなどと思い聞こえる音に集中すると、音はハッキリと聞こえ始めそれが女性の声だと気付くが内容までは聞き取れない。

繰り返し発せられる言葉は優しく語りかけるようであり、強い意志を帯びた様にも聞こえる。

（なんだ？、変わった夢を見てるな、何を言いたいんだろ？）

そんな事を思っていると、言葉の内容までしっかりと聞き取れる様に声は聞こえ、その内容を反復する。

（えっと、私の創った世界で生きては貰えませんか？刺激に飢えた猛々しくも優しい魂を持つモノよ。って何だこれ？）

耳を澄ますが同じ内容が繰り返し返されるだけだ、意味も良く解らないが確かに刺激には飢えている、今の日常も嫌いでは無いのだ。

だが幼いころに思っていた大人ではない、猛々しいと言う表現は自分にはふさわしく無いなとも思うが、そんな願望ももっている。（まあ夢だし答えて見るのも一興かな？）と軽い気持ちで声に答えをかえす。

（いいよ、何が出来るかわからないけれど。俺をここから連れ出してくれ。）

「ありがとう、その思いに感謝します。」

そう聞こえた後には特に何も起こらず、目的の駅の名前に反応し目をさます。

（結構寝ちゃったな、もう着いたよ。変な夢みたな、、）

何て思いながら電車から降り改札を抜け、地上へと続く階段を上った。らこの状況ですよ。。。

「テンプレート的な展開なら導入部をもっとシツカリ行って欲しかったな。」と居るか居ないかも判らない様な神的存在に恨み言を漏らすのは許してもらいたい。

いきなり一人放り出されたのだから、とても冷静なんかなれねえよ！。

さて、現状整理しようか、冷静に！つてやっぱり無理じゃね？ここ何処よ？流石に地球じゃ無いのは解るよ。

認めたくは無いいし、あんなメッセージと返事だけで済む事なの？異世界転移ってさ。

何なの異世界の何処よここは！ナビゲーターは？チュートリアルは？すでにパニックで狼狽えてしまい何が何だか思考が追いつかない。「よし現実逃避で茶を濁そう！」と大声で叫び、足元から永遠とも感じられるほどに広がる大地に倒れこむ。

約10分後

少々落ち着いては来たが、すつごく平原です！、頬を撫でる風が

気持ちいいなあー、何て感じて場合じゃないよね。

「夢落ちつて事も無さそうだな。」痛みに疼く頬を撫でながら呟く。寝ていても仕方が無さそうだ、とりあえず身体を起こすと果てしなく続く草原の先を見据えると、見えるものは一つだけで、あれ地平線じゃね？

「人も動物も魔物もないこんな僻地スタートって、森とか誰かの悲鳴が聞こえるのがお約束なんじゃなかったの？テンプレ乙って言わせてよ！」

思わず叫ぶが、詰まらない事しか頭に浮かんでこない自分に失望した。

時間経過と自分への突込みを入れる事で、何とか思考が追い付いてきたのか、周りを冷静に見渡す余裕が出て来たので。

「泣いても叫んでも状況は変わりそうに無いなあー」と、諦めて「取りあえずは体に異常は無いかな？」と落ち着きを取り戻し、上着を脱ぎ微妙に違和感を覚える自分の体を視ることにした。

すると、「何て事だ！！」と驚くほどに自分の肉体は変化していたのだ。

体は自堕落な生活と、運動不足な生活で弛んだモノではなく、男らしく鍛え上げられた引き締まったモノに変わっている。

見事に割れた腹筋が懐かしいよ、就職する前だから何年ぶりだろ？

そしてシャツの袖から見える腕にも変化があり、左右の腕には複雑な紋様と幾何学的な図形がびっしりと手の甲から肩まで黒い刺青として入っている。

「何この模様？擦っても消えないし刺青かよ…傷の男みたいだな。」ともらしたが、実は少し気に入ら嬉しかったりした。

後は左手首に見覚えのない銀色の青い石の入った腕輪が付いている事以外は記憶に在る服装と持ち物だった。

服装は休日で買いい物に出かけるラフな服装で、パーカーにジャケット、ジーンズとブーツそれと財布に空っぽのボディバック。

戸惑いを感じるが、ユツクリと体を動かし軽い柔軟運動をすると、徐々に感覚が馴染んで自分の体だと思えてきた。

体が馴染むと、落ち着きも戻り、混乱して錯綜していた情報が明確に理解できるようになる。

自分が置かれた状況は今までの時間で嫌でも理解したが、全てが受け入れられるはずもなく、未だに納得するには抵抗が残る。

いまだ理解し難いが、脳内の情報を検索し、その内容を簡単にだがまとめると。

1 - 死んだ訳でもないが日常には戻れない、選ばれた理由は複数いる候補者の中で一番早く問いかけに応じたので当たっただけ。

2 - この世界の名は「セフィラム」と言い、創世の神々が去り繁栄につまづく人族を支援して、繁栄を後押しする事が使命で、それは神の残した人族への遺産である迷宮の攻略。

セフィラムに住まう人族は人間族だけでなく、亜人（エルフ、ドークエルフ、ドワーフ族）、獣人族（狼、猫、兔族）が居るが、魔物や種族間での争っている事。

支援内容は迷宮攻略の為のアイテムと武器防具の創造で、大陸にある大小様々な迷宮内で、種族を問わずにお店をしながら旅をし迷宮の探索を進める事。

材料は現地調達と一部定期的提供がある。俺に与えられた期間は全ての迷宮攻略が70%超えるまでで、それまでは死ねない「限定不老不死」と言う名の強制労働を受ける。

3 - 能力は迷宮間での瞬間移動（入り口ホールのみ）、アイテム精製の錬金合成術、武具の鍛冶錬金術、装備に対する付与魔術が支援の仕事用。

身体能力の向上と体術、剣術、槍術、魔術などの技術がこの世界の最高峰並なのは、素材採取の護身用の能力だ。

（俺が迷宮を攻略しても、この使命からは開放はされない。あくまでセフィラムの人族が攻略しなくてはならない。）

能力は一定の攻略度に到達するか、迷宮内の魔物を倒しレベルを一定値以上に上げると、能力は追加され強化されていく。

両手の刺青が能力をサポートしてくれるが、錬金術に関しては工房で使用すれば成功率が飛躍的に上がり、左手の腕輪は亜空間に出入りするパスである事。

亜空間の中に工房や居住スペースが用意されており、他にも道具を収納したり取り出せたりする。

まるで未来の青い達磨のポケットの様な機能を持つ。

4 - 人族は種族を問わず職業を持っており、職業レベルと技能スキルを持つ。転職すると失われるが、条件さえ揃えば職業を超えてるスキルもある。

5 - 基本的には自由行動可能であるが、迷宮外部で遊んでると永遠に解放されず、一ヶ月以内には迷宮に戻らなければ迷宮に飛ばされる。

移動制限など、ペナルティーは無いが終わるまで永遠に開放されないのが罰とも言える。

大まかにはこんな感じである。

把握と同時に絶望と期待の入り交じった感情が処理しきれず、頭痛と目眩に襲われ再び仰向きに倒れこんでしまった。

見上げた空は青く澄んでいて、目を焼くように容赦なく照りつける太陽も存在する。

そんな所はこの世界でも同じらしい。

「独りでやっていけるの俺？」そんな切なる思いを俺は口にした。

第1章 はじまりと下準備

1話 (後書き)

修正してみましたが今ひとつです、
改善されてるかが不安です
が。
稚拙な作品にお付き合い有り難うございます。

2話

(前書き)

少し文章構成を修正してみました。
読みやすくなったでしょうか？

2話

空を見上げるのにも飽き、スツキリはしない思考の深みから抜け出し、一息つき体を起す。

嫌でも自分が置かれてる現状と、これからの事がある程度把握した俺は、自分に新しく備わった能力を確認を試みようとするが、錬金する材料が手元にない。

「もしかしたら出来るかな？ 憧れてたんだよねー。」

某兄弟錬金術師の兄を真似て柏手を打ち鳴らして、大地に両手を当てると錬金光が！ する事はなく少し恥ずかしいだけでした。

「手を翳すのは合ってるはずなのに？」

鍛冶錬金術の使い方を脳内から念入りに検索し方法をさぐる。

手順を一からたどりながら理解を進めようとするが、「手を翳し魔力を注ぐ？」すぐに理解の出来ない謎の手順にいきあたる。

魔力とは何か、、気合？ それは生命力か、生命力≡魔力なのか？ オーラ？、チャクラ？ 知っている限りの地球でのオカルト知識を搾り出すが答えは見えない。

「瞑想して精神力を高めれば行けるか？」

体内に流れる血流に集中し、それ以外に何か力は感じないかと瞑想を続けるが、何も感じないし変化もない。

「なんでやねん！ 人がやる気を出そうと思えばこれかよ！」

叫べど返事は無い、、ただ寂しくなっただけでした。

そして少し考えると「腕輪から材料は出せるんじゃない？」材料があれば発動するかと思いついて、腕輪を確認して撫でてみると突然の閃光に目が眩む。

腕輪を直視していた為に避ける事も出来ず視界が白一色に染まり何も見えない。

某大佐の如く「目が、めがぁー！」と叫んで独り遊んでいると。

「主よ、何をしてる？ 大丈夫か？」

誰もいなかったはずなのに声をかけられ我にかえってしまい、羞恥で顔が熱くなってくる。

声のする方向に背を向けそのまま膝から崩れ落ち、両手で顔を押さえたまま羞恥に耐え冷静さを取り戻そうと頑張る俺だか。

「何をしておるか解らぬが、平気なのか？」

声の方を恐る恐る見てみると白銀の体毛と蒼い瞳の体長150cmほどの狼がたたずんでいた。

突然に現れた狼の美しさと存在感に放心し固まっていると再度声が掛けられた。

「もういいか？主よ初めまして、腕輪に宿る銀狼にして、主をサポートする事になった精霊、名をアルテールと申す。これからよろしくの！」

腕輪の妖精？いや精霊か、モフモフ、フカフカがキター！！と心の中で歓喜の声をあげる俺。

自然と体が勝手にモフモフ狼に引き寄せられ、抱きしめ顔を埋めようとした途端、激痛が走る！

「な、何をするか主よ！で、であつたばかりであろうが！気安く触れるでないわ。」

噛まれました。泣きそうです、目から汗がこぼれそうです、心も何故か折れました。

潤んだ眼で見詰めると狼の精霊さんと目が合い睨まれました。

「ごめんよ、アルテールがあまりに可愛いからついね、それに独りで寂しかったから我慢できなくて。本当にごめんなさい！」

素直に謝り頭をさげ許しを乞います、知らない世界で一人は嫌過ぎる。

「な、何を言うのか主よ、気高き銀狼の我に、可愛いなどと、突然で驚いて噛みつきはしたが怒ってはおらんよ、だから泣くな主よ。」

そう言われ頬に手を当てると、指先が濡れており我慢できず泣いて

たようです、恥ずかしいです。

でも話し相手と癒しがキター！嬉しすぎる。

「許してくれる？ありがとうアルテール、俺はコウって言うよろしくね、それと来てくれてありがとう！」

と自分の出来る最高の笑顔でお礼をいうとアルテールは恥ずかしそうに答えてくれました。

「よい、以後気を付けてな！前触れなく連れてこられたと聞いておるから多少は大目に見よう。」

「本当に突然で心細くて困ってたんだ、聞いてるって誰から？」

「大いなる意思、この世界に満ちるモノかの？、満ちていたかの？上手くは伝えれんが主に使命を与えたモノじゃ。」

何のことだかさっぱりだが、神的な存在で納得しよう、理解できるように思えないし。

突然の出来事ばかりで開き直った俺は、それからアルテールと話し腕輪の使い方や能力の簡単な使い方、世界の事などを習う。

初対面のぎこちない会話が柔らかなモノになるぐらいに話し込み仲良くなったはずだ。

お互いの呼び名もアルテールはアルと呼び、俺は主ではなくコウと名前で呼びあう事になった。

捕捉ではあるが、アルテール改めアルは齡120年以上を生きる精霊で人格は女性です、精霊としてはまだ若いらしく他の女性同様な齡はタブーのようです。

気付けば日も暮れ、お腹空いたので、亜空間の住居スペースで夕食を取って直ぐベットで泥のように寝てしまったのは、傍で丸くなり眠っている温かいアルのおかげだと言っておく。

後は亜空間の住居スペースは何故か自分のワンルームの部屋でした、

電気、水道、ガスが生きてるのにネットとテレビは死んでる不思議仕様です。

窓は消えていて無かったし、玄関扉から地球に戻るかと思いましたが出れませんでした。

部屋の真ん中に突然転移されるのには吃驚しましたが、俺の希望を言えば扉を開けて入る様な仕様が良かったのに…。

泥の中で泳ぐような眠気から、聞きなれた電子音で目が覚めた。

「知ってる天井だ、昨日の出来事は夢？じゃないみたいだなあ！」
隣を見るとこちらを窺う蒼い瞳と眼があった。

（あつ、あくびしてる可愛い。）と思いながら挨拶はしっかりと行おうと思った矢先に声を掛けられた。

「おはよう、コウよ良く眠れたかの？」

「お、おはよう、おかげ様でグッスリ寝れたよ、慣れた枕だったしね。」

朝食を食べながらアルと話し、何故ワンルームか聞けばサービスとお詫びみたいなモノらしい。

出入り出来るのは俺とアルの制限はあるが、正直助かる。

先進国の文明社会で生きてきたのに、いきなりここ、（「セフィーラム」の文明レベルは古代と中世ぐらいらしいし）では正直生きていけない。

後は御都合主義ヨロシク、アルは知識として俺の世界を知っていたし、冷蔵庫から欲しい食材が出てくるのは魔法で納得していいのだろうか？

「ええー、食材以外の持ち出しは何もかも出来ないの？」まあ、何時でも来れるしいいけどさ。

朝食を終ええた俺達2人？は小休憩を取りながらも話しを続ける。

そしてアルが

「では、コウよ昨日の続きを工房で実際に商品を作りながら練習するぞ。」と言ったので気持ちを切り替え答える。

「うん、そうだね昨日は色々ギリギリで理解と言うより大体を把握するので精一杯だったからね。誤解も一杯してたしね」

「魔術や魔法、錬金術の無い世界からきたのじゃ、頭に知識は有るであろうが、実戦して慣れなければ無意味じゃからな。これは頑張っ

って慣れてもらうしかないの。」

アルの励ましを受けヤル気が出てきたので早速移動することにする。

亜空間には機能的で本格的な工房があり、倉庫も隣接されている。工房は高校の理科室程度の広さで、大きな作業台には刺青と同じような魔法陣が描かれ、机の周囲には大量の棚が壁に備え付けられている。

作業台の反対側には床に魔法陣が刻まれ炉と鍛冶道具が置いてあり男心をくすぐる光景が広がっている。

倉庫は工房の倍の広さがあり、ある程度大きく自由に拡張できるらしい。

しかし一定の基礎レベルが無ければ駄目ではあるが。

アイテム制作の錬金合成術は、作りたい物の原料を用意するか、アイテムの価値と同等の魔石、あと俺の魔力と何か触媒が必要なことを教わった。

触媒は迷宮で魔物を倒すと手に入り素材として使うことも出来るが、触媒になるモノも多いようだ。

鍛冶錬金術には設計図か明確な完成イメージに材料の金属や素材が必要であることと、仕上げの熱処理などは経験と勘が必要な工程は無視される。

金属だけでなく木材、革や布でも、簡単に形は作れるが、設計図やイメージの精度で仕上りの性能にはばらつきが出る。

そして憧れ？の付与魔術にも必要なものがあり、目的とする属性石「エレメント」かそれと同等の魔石、それと付与対象物である。風属性の剣で振るとカマイタチが飛ぶような剣は、今のレベルと素材では製作は不可能だ。

だがこの世界の希少魔法金属であるオリハルコンやアダマンタイトやミスリルなどなら可能であるらしいので、期待に胸が膨らむ。

付与方法のもう一つの方法は、対象物に魔力と共に概念や属性、効果を定着するまで注ぎ込むかである。

後者は非常に時間と魔力を消費するが、一般的な方法であり、強い力を定着させるには年単位かかることもあるとか。

属性石が希少なので魔石を代用品に使うと採算が取れないようだ。この辺りの知識を魔力の使い方と共に手順を踏まえて、昨日教えてもらったのだ。

そして初めてのアイテム作成についてに取り掛かる今ワクワク落ち着かないでいると。

「コウよ、もう少し落ち着くのじゃ。めったに失敗の無い初級のものじゃから、深呼吸して気を楽にな。」言われてしまい、顔が熱くなる。

本当に子供みたいだな俺は。

大きく深呼吸しアルに落ち着いたことを示すために視線を飛ばし、先を促す俺。

それを見て目を細目返してくれるアルの存在が嬉しかった。

「では、よいかの？錬金合成術の基礎、冒険者必携の品、最初は微量の体力と傷を癒す初級赤色ポーションじゃ！」

アル曰くシヨップで最も安い加工品らしく、ただの薬草がHP25前後回復するのに対して、赤色ポーションは安定してHP30回復し軽症の擦り傷程度は治るらしい。

価格は薬草が10Lでポーションは20Lらしく、薬草と違い長期保存出来るのが利点である。

ついでなので貨幣について話しておく、硬貨の種類は銅貨、銀貨、金貨の三種に各大小のサイズがあり10単位で種類が変わる。小銅貨が1L、中なら10L、大100Lだ。

日本の通貨価値で見ると1L=50円ぐらい？地域で相場が違うので平均それぐらいになると思う、価値観も違うようではつきりできない。

粗悪なパンが1つ2Lだが、武器防具は中銀貨（10000L）以上するようだし、硬貨がまだ貴重なようだ。

薬草からの合成を作業台にて行うのだが、鍋に薬草を入れ魔方陣の中心に置き手を翳すと、刺青と魔法陣が僅かに光り薬草が赤色の液体へと変化していく。

反応が終わると光は消え鍋を満たす赤い液体がなみなみと揺れていた。

「うん？何か薬草に対して液体が多くないか？」

首を傾げているとアルが声を掛けてくれたので鍋を見せると、アルも目を見開き驚いているようだ。

「アル、これって失敗？何か多いよね一枚しか使っていないのにね。」

「いや、一応成功のようじゃよ？鑑定してみたが赤色ポーション×3となっておった。」

そう聞いて一安心しているとアルが言葉を続ける。

「でも、やはり量が多いの。本来なら出来て2杯なんじゃがの、コウの合成は特別だからのー、こんな事もあるじゃろ。」と軽く流し笑っている。

それでいいのか？いいよね軽い疑問は魔法で片付けちゃおう、うんそれでいいやもう。

その後もポーションと毒消し、麻痺解除薬など、定番商品を作り瓶詰めして特に何の問題なく終わり、俺もアルも上機嫌で工房を後

に昼食にむかうのだった。

初めての錬金合成術は成功し満足したが、魔力を消費したためか異常に空腹で、見るだけで胸焼けするほどの食料を食べれた…。

試しに飲んだポーションの味は、赤い青汁でした…、美味しくないよこれ。

2話 (後書き)

まだまだ本筋が遠いです。
少し手を入れた結果が心配だ、
うーん、もう少し文才欲しいな。
ご指摘の部分を修正しました。

3話（前書き）

まだまだ下準備終わらないです。

3話

午後からは武器を作ってみよう！

午前中の錬金合成術は成功し、午後は鍛冶錬金術を行う事になったので、クローゼットの奥からつなぎを引っ張り出し着替える。

靴箱で眠っていた地下足袋を履き職人っぽい格好になると、アルが「張り切っておるのー、コウもやはり男じゃの。」と笑っていた。

まずは初級編なので、作るのは青銅製で両刃の直剣にする、古代ローマで使われていたグラディウスと言われる全長60cmほどの剣である。

単純シンプルで設計図も簡単に描けた。

参考文献は某ネットワークゲームの攻略本で、武器防具からアイテムまでアイデアには困らなそうだ。

眺めるだけだった装備を手に来るのが楽しみで仕方ない。

工房の炉に火を入れ、倉庫から青銅のインゴットを5kgとオーク材を持ち出し用意をすると、アルが手順を改めて指示してくれる。鍛冶錬金術は集中力が決め手であるらしく、注意された。

（ソワソワしすぎたか、でも武器制作は男のロマンだよなー。）と心の中で思う。

床の魔方阵に青銅を置き手をかざし1kgの固まりに分ける、楽に金属を加工出来ることに感動を覚えつつ、用意したグラディウスの設計図を用意し刀身の錬金に取り掛かる。

魔方阵に金床と槌、ヤットコを用意し青銅を何度か打つと、槌を振るうごとに刀身が出来上がって来るのが不思議だ、腕の刺青と床の魔方阵の相乗効果で適当に叩いても形は崩れない。

キリの良い100回を打つとすっかり形はグラディウスになってい

た、研ぎもしていないのに輝く刀身が本当に不思議で仕方ないのだが。

後は、柄と鞘をオーク材と少量の青銅で制作して完成だ、魔方陣と腕の刺青の光が止むと、軽い疲労感に襲われたが、アルに鑑定してもらった為にグラディウスを持って、少し離れて座り見守ってくれていたアルの元に行った。

「アル、お待たせ出来たよ！観てくれるかな？」

鞘から引き抜きアルの前に置くと、立ち上がったアルの瞳が光った気がした。

「ほう、初めての作品にしてはなかなかじゃの！」

アルの鑑定結果は以下になった。

「品名」青銅のグラディウス＋＋

（攻撃力：＋34 スキルスロット：空き＋2）

普通のグラディウスで攻撃力は＋25前後で、スキルスロット2個は滅多に付かないらしい。

スキルスロットには付与魔術ではなく職業別のスキルを登録できるらしく、自分の職業以外の登録には迷宮内で手に入れることが出来る技能球スキルストーンが必要なようだ。

低級スキルは比較的多く存在しているらしく、レアなアイテムだが迷宮探索で手にすることも珍しくはないようだ。

結果は上出来過ぎた。

簡単に武器が造れて、ちょっと引いてしまった俺がいるのだが…。

（これ売っていいの？いくらで売れるんだろ？）とお金の事を考えたり、

（迷宮探索の支援直ぐ終わりそうじゃん。）と思っていたところが。。。

アル曰く青銅の剣では珍しいが特別では無いそうで、まれに3個付きも存在するようです。

そんなに甘くはないよね。。。。

初作品を片手に数度振るうと、チートな体はどう動かせば良いのか解るようで、初めての西洋剣のはずですが風を斬る音が鋭く響き、力み無い動きがとても自然でした。

輝く刀身が嬉しくてニマニマして本日は終わりです。

夕食中にアルから聞かされた新事實は、鍛冶錬金は別に作業台の魔方阵でも出来るし、特別に金床や槌使わなくても出来る。と言う事を教えてもらいました。

実際の作業を模した方がイメージが固まるので成功しやすくなるだけのようです…。

3 話（後書き）

文の長さはランダム過ぎです。

携帯投稿からPCに切り替えました。

修正しつつもボチボチ書きますね。更新不定期です。

4 話（前書き）

短いので本筋まで遠いですがヨロシクお願いします。

4話

異世界3日目も、このワンルームの部屋の馴染んだベッドからはじまる。

「異世界の実感まるでないよな、長い夢だったりするのかな？」
なんて思いながらアルに挨拶をし身支度をする。

今日もアイテム作成の練習だ。

これからは工房に入るときはツナギと地下足袋に決めた。

昨日布団に潜ってから気が付いたが、鍛冶錬金術に炉必要ないじゃん。

燃料無くて燃えてたのも魔法？

つまらない事が気になって少し寝付きが悪かったです。

今日は遂に付与魔術の実践練習だ。

アルと一緒に工房に向かい、アルによる付与魔術の講座で基礎を確認したらいいよ本番だ。

昨日造ったグラディウスと一緒に小さな魔石を用意し、作業台の上に並べる。

まだ自分の使える付与魔術の種類は少ないが、補助に魔石を使うことで実力の底上げを行う。

そして、今回は基本的な道具の機能強化を行いたいので、剣に付与するのは「硬化」か「鋭敏化」のどちらかを実行しようと思うが、迷ってしまう。

付与魔術の失敗はリスクが大きく、対象物の破壊と魔石の消失、自身の魔力も勿論消費する。

迷いは禁物なのだ。

そう思い緊張感を抱きながらも決断を出す。

今回は「硬化」だ！、長く使う中で変形を防ぎ、刃こぼれをしにくく出来るだろう。

気持ちを引き締めグラディウスに手を翳し魔力に「硬化」の意思を乗せる。

魔石の魔力と自身の魔力を混ぜ合わせ、対象のグラディウスに注ぎ融和させる様に力を維持する。

額から汗が流れ落ち、頬を伝う感覚に集中力を乱されるが何とか堪える。

すると力が抜けるような感覚がし、失敗か？と思い焦るが、グラディウスは破壊されておらず淡い黄色のオーラのようなモノに包まれ輝きを放っていたが、時間の経過と共に消えていった。

しばし放心し眺めていたが、急な脱力感と倦怠感に襲われ座り込んだ。

「ほう、初めてで成功させたか。コウの才能かその刺青のお陰か迷うが、呆れるばかりじゃ。」

詳しく聞けば人間族処か亜人、獣人に出来る魔術ではなく、精霊でも出来るモノに出会うことが難しいのが付与魔術らしい。

「ああー、これがチートなんだ。店に本当に出して売っていいの？」
変なの造れば世界を混乱させ滅ぼすじゃん。

人類滅亡フラグは自分は立てたくないぞ！

「そんな心配は今のコウには必要ないわ！レベル100にしてから言うが良い。」

この世界のレベルはMAX99ですよ？不可能じゃないですかア
ルさん。

まあ、本当に今の俺では基礎でこの疲労だから心配要らないと思

うが。

そんな事を考えているとアルが続けて

「今のレベル1のコウでは今日1日もう何も作れまい、それほど高度な業であるのよ、付与魔術とわの。」

と色々と引つかかる発言に混乱しそうになったのは、俺にもレベル制度が適応されてる事に驚いたからだ！

チートだから無限の魔力とかレベルカンストだと勝手に思ってた。した。

じゃ、積極的に迷宮に潜って魔物と戦わなきゃ駄目じゃん！ハードルがいきなり上がったよ、ムリムリだって。

「ああ、だから戦う能力付いてたのか。」
納得です本当にあり…！

まあ、いいや俺も男だ、死なないしなんとかなるでしょ？考えてしまう事を放棄し、改めて付与効果の付いたグレイウスを鑑定してもらおうと以下の様になった。

「品名」青銅のグレイウス++《銘》亀：耐久性向上+5

（攻撃力：+34 スキルスロット：空き+2）

付与魔術の効果は銘で印すようです。制作者じゃないんだ銘って、これも異世界だからでいいか。

問題を新たに残して付与魔術成功に終わった。

しばらくは錬金術を練習して、まず自分の装備をつくらなきゃなあ、今ある材料と魔石の確認して計画するか。と考えアルと今後の事について話し合い計画を練り上げて、異世界3日目も無事？終了しました。

ちなみに、お風呂は毎日入ってるよ。洗濯もね！洗濯機とか家電

壊れたらどうしよう？なんて思いつつ、今が幸せと思った俺はバカ
でしようか？

4 話（後書き）

付与魔術の「硬化」耐久性向上 + 5 は青銅の剣を鋼の剣程度にします。

導入部は後は三話ぐらいです？

5 話（前書き）

少し加速ですが、本筋は遠いけど見えてきた？
構成を修正してみました。

5話

これから開店準備と探索準備を整えるためにも、倉庫の材料ストックを今日は把握しようと、サラリーマンとして愛用していたシステム手帳を持って倉庫に向かう。

改めて倉庫の中をよく見ると、綺麗に整理されており、沢山のモノで倉庫の半分が埋まっている。

見た目には以前の世界で見慣れたようなモノが半分、何だろうか？と思うモノが半分だろうか。

何故自分には鑑定スキルが無いのだと、心が折れそうになったが、心強い相棒のアルが居るし、これでいいのかも知れない、と思い直し作業に手を付ける。

まずは見慣れた品から整理していくと、金属材料が結構あり種類もソコソコと多い。

見た目で金属を判断出来る訳でもないのに、アルに頼み種類と量を鑑定してもらいながら進める事にする。

金属類は銅からはじまり、青銅、真鍮、錫、鉛、鉄、鋼、銀、金、白金が100kg づつ、インゴットで積まれている。

それ以外にもニッケルやクロム、アルミニウム、モリブデン、タングステンといった金属のインゴットや合金が少量あり、

「これ売れば一生遊んで暮らせるんじゃない？」と無駄にサービスがいいよなあと思い、続けて使命さえ無ければもったいいないとも考えてしまう。

金属以外は細かく乱雑としていたので、数量は諦めるしかないでしょう？見るだけで嫌になったからいいよね。

よく使いそうな物をあげると、革の種類が多くあり、牛革、馬、

山羊、羊、鹿、狼（！？アルいいの？）とか、蜥蜴、ワニ、鮫、エイなんかもあって、布の生地なんかも綿、麻、絹に羊毛といった白い生地が大量に積み上げられて、染料まである。

「まるでハンズじゃね？」と言いたくなつたのは俺だけじゃないはずだ！知ってる人間は俺と狼しかこの世界には居ないけど。

宝石、輝石、ガラス玉も多く大小様々加工したものの原石共にあった。

木材はオーク材等の硬い木が何種か製材して置いてあり、石材も複数あった。

制作材料だけでも多いのに他にも、ポーション用ガラス瓶（大量）や羊皮紙、パピルス？みたいな紙など、見ていて頭が痛くなつたよ、もうお腹いっぱいです。

だが、これで半分で後半分は漢方薬っぽい薬の材料に魔石、魔石も大きさと色違いが有って焦つたが、赤＞白で貴重度が違い、黒い魔石はブランクらしい。

術の難易度が上がれば使用する種類を変えるのが一般的らしい。成功率が変わるようです。

最後に魔物体の一部があつたが、駆け出しでも集めれる物で、あまり使わないらしいが、ここに置いてるのは試されてるのかな？新しく活用方法を模索しろとか？

後大切な物があつた、各種銀貨と銅貨がお釣り用で少量これで終わり。

倉庫の整理と材料の把握で1日が潰れ、開店準備の錬金は進まず、自分の装備にも手を付けていない。これから先が長いなあーっ。

翌日からは、ひたすらに錬金術を使い店の品揃えを増やす事に心血を注ぎ、あつという間に3週間が過ぎた。

何故だか錬金すると一個しか出来ないアイテムは何度錬金しても

1個しか出来ないが、1個と2個出来るアイテムの種類は少なく、3個出来るアイテムの数が多く調子に乗り数を99個造ってみた。

本日造ったものは以下に箇条書きで。

>回復アイテム<

薬草×200

赤色ポーション×99

黄色ポーション×99（赤色の三倍）

毒消しの丸薬×50

毒消しポーション×30

麻痺解除ポーション×60

視力回復ポーション×40

石化回復ポーション×20

止血促進包帯×30

>探索アイテム<

迷宮脱出アイテム銅の羽×99

閃光玉×99

毒薬×99

麻痺薬×99

休憩用簡易結界（5人用）×40

魔物避け香炉×30

>雑貨<

鉄製ナイフ×20

ロープ20m×20

松明×10

魔術式カンテラ×5

革袋（大中小）各×20

（製作しストック出来るアイテムの数に制限は無い）

錬金合成で作れる物を揃え、まずは道具屋から始めることにした。価格は迷宮が在る土地の相場でいいし、迷宮内で採取出来る品と物々交換もする。

経営はアルがしてくれると言っていたが狼で出来るの？信じて任せただけけど。

この三週間で錬金術レベルが11に上がり、自身のレベルも4になって少し体が逞しく成った気がする。

これで店の開店準備は終わり？足りないのは後で追加でいいしね、商品開発も後回しにしてしまおう。

そして、いよいよ俺の装備を造る時が来た！

この世界ではレベルはあっても装備品の制限レベルは無い、装備品のグレードはあくまでも目安で、今の俺がSランク装備を着る事も可能なのだ！

だけど現実には厳しく、この世界ではSランクどころかCランク上級品さえほとんど流通しておらず、確認されている最高の品はA下級品であり、それが伝説級の装備扱いらしい。

今の俺が造れる最高の装備は、時間と魔力、材料を無視すればAランクも制作可能なのだが、無駄にする材料と魔石は在庫では足りない。

しかも完成に今のレベルだと100年以上の時間が必要とアルに突っ込みをつけて、制作は諦めた。

不老不死だし良いと思ったのにね。

なので造る装備の目標は、Cグレード上級で武器がCグレード内

でユニークレアの品である。

（ユニークとかレアとかはこの世界での価値じゃなくて、俺の主観だよ？）

憧れた装備の外観にするか、実戦を効率で行くのかも迷ったが、半分づつを取ることにして設計と材料の選別を始めることにした。

アルが空気扱いだけど、実際は毎日モフってお話して一緒に寝てるんだよ、愛すべき最高の相棒ですよー！

5 話（後書き）

アイテムの効用など不明な点は脳内補完をお願いします。

ソコソコマイナーな武器が出るので描写は入れますが、詳細は上と同じでお願いします。

次回主人公の装備を頭から爪先まで用意します。

6話（前書き）

ようやく一章も終わりが見えました！
構成を修正しました。

6話

注意 - 装備ステータスは最後に纏めて書かれます。

ついに決まりましたよ！俺の初装備の全貌が、詳細を詰めるのにアルと話し合う事3日。

試作してみないままぶっつけ本番は不安ですが、何故だか殺りきる？やりきれる自信が両腕の刺青から溢れます。

今何か新しい扉を開けてしまったかもしれないですよ？（笑）テンションもマックス気合い入りますよー！

防具から詳細を説明させて頂くと、見た目は某狩猟ゲームMHのスカルフエイスですが、それだけのはずがありません。

材質はタングステン合金の3mm鉄板と軽量化のチタン合金も併用します。フルフェイスメットの様な構造です。

シールド部分がチタン合金で他はタングステン合金です、重量が5kgを超えたので、付与魔術で軽量化するしかありませんよ。

やり過ぎでしょうか？多分物理的には魔物の攻撃は通りません。

しかし、欠点は重量と衝撃は通す事でしうか？

鍛冶錬金術の結果は2度の失敗の後成功です。

赤い魔石ではなく緑の高価な魔石を結構無駄にしてしまい確実に赤字です。。。

アルに相当な強さで蹴られました、痛いし表情の怖いアルにビビりますよ、トラウマになりそうです。

失敗の原因は俺の無駄に高かったテンションのせいでした。。
本当にごめんなさい、アル反省するから唸らないで！

練っていた計画が再考され、Cグレード上級は諦めることになりました。

装備は出来てCグレード下級です、、何故こうなったと後悔で涙が滲んでしまい悔しい。

体全体を適度に覆う、ハーフプレートメイルから、最低限を金属で覆い他は丈夫な革で造るレザーメイルに変更です。

基本職が錬金術師なので紙防御は怖いのですがね、いくらチート能力で世界最高峰の使い手でも発揮出来ないと無意味ですからね。

硬い装備に守られて槍でチクチク狩る予定が狂ってしまったじゃないか！いくら不死身でも痛いのは嫌なんだよ！。

個人的な希望で、レザーメイルは魔物の特殊な材料が無いので嫌だったのですが。

変わりにワニ革とかですかね？と聞いてみると、呆れ顔でアルに「耐久力が心配なら付与魔術があるだろうに。」と言われ苦笑いするしかありませんよ。

ホントおれのバカ！、耐久力向上や衝撃分散の付与効果を与えれば普通の布でも、そこそこは耐える代物が出来るだろうに、まだ以前の常識が抜けないようだ。

気を取り直し、ネトゲ攻略本でデザインを見てみると良いのがありましたよ！。

でもドレイクってなに？竜種？爬虫類のワニ革か蜥蜴でもいいのか？再現無理っぽいなー、仕方ない設計し直そう！

また2日時間を掛けてアルと戦術まで見直した結果、重戦士を諦め、軽戦士系で決まりました。

俺の体格や筋肉の質だと最初から軽戦士の方でしたが、MHでは生粋のランサーです、憧れたっていいじゃん？。。。

片手剣と盾をメイン武器で、サブウエポンが槍か投擲武器のスピードファイターで決定です。

近接職は苦手なのですが、まああくまでゲーム内でのお話すがね。戦闘魔法もあるのですが威力に比べ消費する魔力が多すぎて多用出来ないのがこの世界の魔法のようです。

話は戻って防具制作です。

造るのは上半身と下半身、腕に靴、盾も入れると5個、頭を除いてセット効果を持たせてみたいので、丁寧に上質に造ろうとおもいます。

材料はワニ革と蜥蜴革がメインに金属部分はチタン合金、布地は麻と羊毛にします。

色は青をメインに濃淡を付け、銀糸で縫い合わせるイメージで固め、気を引き締めて鍛冶錬金術にとりかかる。

集中が切れる事も無く、4時間かけ何とか失敗なく完成に漕ぎ着けたが、チタン合金の在庫が尽きた。

首、喉と肩、各関節に胸など急所は金属で他は革、裏地が麻で総重量17kgと少々重いが、体にフィットしているおかげで体感は軽く感じます。

兜に武器と盾も含めて25〜30kgが今の限界の様な気がするのですが、剣と盾の重量は自然と決まってくる。

アルミ合金製で付与魔術で強化もいいかもしれないが、選ぶとなるとチタン合金じゃないかなと思うのです。

剣と盾の設計デザインは仕上がっているが、少しでも盾を軽量化し、剣に重量を持たせたいと考えているのだ。

盾の形状はカイトシールドと呼ばれる形で、全長1m、全幅は最大で45cm、雫型を逆さにし、丸い部分の中央を尖らせてます。盾の両端で殴れる様にした。平面部分も緩やかに全体がカーブして

おり、攻撃を受け流せる様な構造になっており、左腕の手甲に固定させ手の自由を確保する。

材質と構造はアルミ合金の3mmとタンゲステン合金の複合板で、意匠として双頭の鷲が翼を広げている彫刻が刻まれているが、重量は3kg以下に収まった。

最後に剣だが、テンプレならば日本刀と行きたいが、引き当てて切断する技量や耐久性にメンテナンスを考えると不向きと判断し、断ち切り突く武器にすることに決めた。

武器の名前はファルカタと言い、形状は長く湾曲した剣で根元より2/3は片刃で残りは両刃になっており、先端は鋭く尖っている。刃渡りは75cmと少し短くし、刀身を肉厚にし、柄も含めて95cmの片手剣である。

材質はモリブデン合金で柔軟性と重みを持たせ、拵えは銀と黒檀で柄頭には狼の彫像の意匠があり、滑り止めに革紐が握りに付いている、鞘を除く重量は1,28kgとなった。

何より武器に力を入れて錬金したので、気が付けば三時間も経っていた。

これで装備は完成に近づき、残すは付与魔術だが、今の自分には1日一個が限界である。

その後一週間を掛けて付与魔術をかけて行っただが、魔方陣や魔石、刺青をフルに活用した結果無事に完成を迎えた。各装備品の能力は以下に箇条書きで。

「兜」スカルフルフェイスマスク金剛+

グレードC上級

《銘》羽：重量軽量化 - 30%

(防御力+39 スキルスロットル+1)

「上身鎧」チタンプレートレザーメイル
グレードC下級

《銘》蓮華：セット効果衝撃分散向上+12%
(防御力+31 スキルスロットなし)

「下身鎧」チタンプレートレザーゲートル
グレードC下級

《銘》蓮華：セット効果衝撃分散向上
(防御力+32 スキルスロットなし)

「腕具」チタンプレートレザーグローブ+
グレードC下級

《銘》蓮華：セット効果衝撃分散向上
(防御力+30 スキルスロット+1)

「足具」チタンプレートレザーブーツ
グレードC下級

《銘》蓮華：セット効果衝撃分散向上
(防御力+32 スキルスロットなし)

「盾」プレートカイトシールド+
グレードC下級

《銘》蓮華：セット効果衝撃分散向上
(防御力+33 スキルスロット+1)

「片手剣」ファルカタ・ウルフ+
グレードC中級

《銘》隼：攻撃速度上昇+5%

(攻撃力+58 スキルスロット+1)

出来た装備は小規模迷宮をクリア出来て、中規模迷宮の中層後半迄は行けるそうです。

苦労したかいがあつたとしみじみ思うのでした。

初期装備が高性能過ぎる様な気もしますが、安全安心には代えられないと思うのです。

考えてみれば、まだ魔法防御が皆無だからアクセサリを造ろうと思うのですが、必要になってからでもいいか？

序盤から魔法を使うような魔物出ませんよね？ホントに大丈夫ですよね、たぶん行けるはず。

ナイシヨでアルの装備も造ってみたけど着てくれるかな？

牛革とアルミ合金で作った鎧に鋭利な棘が付いた装備ですが、ヤマアラシ？みたいになつたからボツだな。

6 話（後書き）

ファルカタはククリナイフに似てます。
ファルカタ 剣でググって見てください。
詳細をみていただけますよ。

7話（前書き）

いよいよ本筋までできました。短いですが、出立までの間の話は閑話で書けるといいのですが。構成を修正しました。

7話

商品と装備も一通り揃い、アルと現状を確認し、これからの行動について話し合い、行動の詳細を詰めていく。

話し合った結果として、3日後この亜空間を出て本格的に迷宮内で活動することになった。

装備の制作で基礎レベルが上がり4 7

錬金術のスキルレベルは20に、付与魔術は2になり付与出来る内容が増えたのが嬉しい。

耐久力の向上や鋭敏化の低レベルの付与魔術は日に2回行えるようになり、製作の効率が上がるのありがたい。

行き先を話し合ったのだが、この世界について少し説明を受ける。セフィラムにはユグラートと呼ばれる一大大陸があり、大陸には3つの大国に中小規模の国家が20ほどある。

中小規模の国家は大国の属国として存在しており、複数と同盟を行っている中立的な国家もあるようだ。

各国には国の規模に準じた迷宮があり、地域特色のある素材が採れるらしく、迷宮内の魔物は、地上の魔物のと違い死ぬと魔石と有用な体の一部を残し消えるらしい。

迷宮は資源の採取場であるが、定期的な魔物の大繁殖があり、常に人員をさき魔物の駆除を行わなければ溢れた魔物が迷宮から排出され人々を襲う。

現在地上に存在する魔物は大昔に迷宮から排出されたモノが繁殖した結果だと言う、人がまだ抵抗する力も無い時期から迷宮は存在しあり続ける。

国家間の争いはほとんど無く、人口の増加と減少が釣り合っており、

迷宮と地上の魔物に対応するので精一杯だと言う。

まずは小規模国家の難易度の低い迷宮で経験を積み徐々に探索者支援を行い攻略してもらおう、と言う事で落ち着いた。

創成の神々が去り迷宮は産まれたそうだが、何か迷宮には自分がここに飛ばされた原因が隠されているようにも思う。

まずは装備の制作で消費した希少金属の補充がしたい、支給される素材は10年サイクルだと！？不死身だと時間の感覚が変わるのだろうか？

金属系統の素材は大陸南部で豊富に採れるようで、それを聞いて直に最初の行き先は決定した。

それより今は、商品開発や商品のストック、装備品の錬金や研究、バリエーションを増やすのが急務だろうか？今は余裕が全く無いけど気持ちは焦るものです。

溜まっていた疲労が癒えたのは丁度出立の朝だった。

この世界に来了日以来浴びていなかった太陽を全身に浴び、大きく伸びをしてアルとお互いに見つめ合う。

どちらともなく頷き、それを合図に腕輪を掲げ、南の小国アフレッドにある迷宮へと転移を発動させた。

どんな冒険や出会いが待っているのだろうか、これからの始まる日々に期待に胸をふくらませ目を閉じた。

7話（後書き）

いよいよ次回から迷宮に行きます、コウとアルの冒険の始まりです。
探索に商売、それに錬金術と大忙しです！
登場人物増えます多分。

第2章

迷宮での日々と探索者達

1話

(前書き)

本編になりました、文体に纏まりが出ません。
初戦闘がありますが、この描写で行けるか不安です。

第2章

迷宮での日々と探索者達

1話

初の転移先はユグランド大陸南部の小国であるアフレッド王国、亜人が多く活気に溢れた国であり、存在する迷宮の難易も低くて、魔物も弱い部類で治安も良い。

一瞬の浮遊感の後目を開けると草原ではなく、剥き出しの赤茶色の岩石で囲まれた空間にいた。空気は澄んでおり綺麗な水をたたえた泉もあり、天井から降り注ぐ光が神秘的で美しい。

景色に見惚れて放心していると、アルに声をかけられた。

「いよいよココから始まるのじゃな、コウとは長い付き合いになるの、まずは一步共に踏み出そうか、ヨロシクのコウ！」良い笑顔？の狼にドキッとして直ぐに反応出来ませんでした。

まずは迷宮がどのようなモノか？自分の実力はどの程度通用するのかを確認するために迷宮に潜る事にする。

完全に装備が装着されているかを確認し、腰から剣を抜き点検し終わるとアルがこちらを優しく見てくれて嬉しかった。

「準備出来たよ、行こうか！」と言い放ち、岩壁にポツカリと空いた迷宮一層目に続く階段に向う、スカルフルフェイスのシルドを下げ薄暗くヒンヤリとした階段を降りた先には、ホールの雰囲気と変わって綺麗な石壁に囲まれた緑豊かな空間が広がっていた。

「すごいな、地下とは思えないな。」と洩らした言葉にアルが答えてくれた。迷宮は地下に広がっているのでは無くて、工房や部屋と同じで亜空間として広がっているのだと。

周囲を警戒しつつ、迷宮内を観察しながらアルに先導してもらい進んで行く。アルが居るので自分はいきなり慌てなくて大丈夫と言われているが、初めての实战がこの後あると思うと緊張が抜けない。

探索しつつアルの指示で薬草やキノコなど錬金術で使える素材を採取を行う。見事な大樹の根元で麻痺解除薬に使うキノコを採っているとアルが注意をうながす、魔物が近づいて来たようだ。

「左前方の茂みの奥から魔物が来ておる、数は3じやの、一階層の魔物じゃコウ一人で処理せよ。」

頷きを返し、立ち上がり腰から剣を抜き盾を構える、静かに深呼吸をし緊張をほぐすと、左前方の茂みの脇に気配を消し潜む。

茂みが揺れ現れたのは身長が1mほどの醜い容姿の額に小さな角があり背中に蝙蝠のような小さな羽をもつ魔物が三体、俺に気付かず通りすぎていく。

今が絶好のチャンスと覚悟を決め、一番手前に居る魔物の肩口へと振り上げた剣を降り下ろすと鈍い抵抗を感じながらも両断する。勢いにまかせ振り向いた2体目の頭をシールドの先端で殴ると、めり込んでしまい抜けなくなりドキッとするが腹を蹴り飛ばし盾を抜くと最後の魔物がコチラに向い枯れ枝の様な腕を突き出し、牙を剥きながら襲いかかって来たが、盾を構え半身になり剣を突き出し迎え打つと剣に頭を突っ込み絶命したようで盾に衝撃はこなかった。

呼吸が止まっている事に気付いたので、ゆっくり深く呼吸し残心する。他に魔物はいないようだが警戒を解かずアルがやって来るのを待つ。魔物の遺体は溶けるように姿を失い床へと染み込み消えた。後に残ったのは親指大の赤い魔石と小指の先程の角だった。

「弱いとは言え、インプを三体瞬刹とは驚かせてもらったわ、コウは実戦の経験があるように思えたがの？」

真っ直ぐ見つめられ褒められると居心地が悪く苦笑いを返すしかなかった。平和な日本では命懸けで戦う事は無いとは言え、俺に關してもそう変わらないまでも、田舎の旧家の長男として産まれたら多少の武道や武術は仕込まれる。家を守る為にと、そんな過去が頭に過り顔が引き吊ってしまった。思い出したくはない、あそこから俺は逃げ出したのだ。

不思議そうに首を傾げて見上げるアルに気が付き、可愛らしい仕草に癒され我に歸り、今度は自然と笑い返せただろうか。

「本当に実戦は初めてだよ、ただ訓練はしてたことがアルだけだよ。」

納得してくれたのかアルは頷き一言、見事だったと褒めてくれた。ドロップを回収し腕輪に放り込み探索に戻る。

少し嫌なことを思い出したが、迷宮内で気を緩める事は出来ない、頭を振り気合いを入れ直しアルにつづく。

第2章

迷宮での日々と探索者達

1話

(後書き)

主人公の過去を少しずつ書こうかと思っています。
自己評価の低い彼には色々あります。
次回もまだ探索です。

2話（前書き）

主人公強化回です、早すぎですかね？

2話

戦闘を終え、まだ興奮が冷めなかったがここに留まって魔物が再び現れるかもしれないので、探索を再開する。

アルは基本戦闘には向かない、補助に特化しているらしい。綺麗な銀色の毛並みを土や血で汚して欲しくはないので、一緒に居てくれるだけで十分だ。

しばらく歩き2階層に続くであろう階段を遠目で確認した時、茂みから額に長い一本角がある大型の兔が飛び出し敵意をコチラに放つ、迷宮の魔物はアクティブモンスターのようだ。

直ぐには飛び掛かって来ないで、じつとコチラを睨み姿勢を低く構えて様子をうかがっているようだ、ユツクリと魔物から目を離さず剣に手をかけた瞬間、勢いよくコチラに向かって突進してきたが、十分に対応出来るスピードであったので、半歩身をずらしすれ違い様に切りつけられ、剣に軽い抵抗を感じ当たったようだ。抜き打ちに成功したが振り返り構えると兔は魔石と毛皮になっていく。

その後階段に辿り着くまでに兔が二羽とキツネ型の魔物一体倒して、2階層に降りていく。

2 3階層にはインプとホーンラビット、フォレスフォックスの三種の魔物しかないようで、苦戦する事は無く4階層まで辿り着いた。

迷宮内には罠が有るらしいが、アルに掛かればどんな罠も見抜けるようで心強い、フォレスフォックスを倒しドロップを回収しようとすると、突如と新しく魔物が4体も現れた。

初めて見る魔物は狼型でアルよりは小さいが、コチラに牙を剥きながらうなり一定の距離を取っている。

1体が吠えると残りの3体が距離をつめ襲いかかってきた、3方向からの攻撃にヒヤツとしたが冷静に中央の魔物に向いシルドの面で殴り怯ませ右方向の犬ツコロを両断し、左の魔物に警戒しつつも殴った魔物の頭を蹴り碎く、一瞬で2体もの仲間を失って硬直したリーダーらしき魔物に向かって走りより切りつけるが浅かったようだ。

仕留め損ない前後を挟まれてしまった、手負いに止めを刺したいが背後は見せない、だが膠着すれば俺が不利だ、覚悟を決め手負いの魔物を狙い蹴りつけ足を折る、直ぐ様反転し勢いのまま剣を横一線に振り抜くと、飛び掛かって来た魔物を綺麗に切る事が出来た。右足に痛みが走り見るとリーダーらしき魔物に噛みつかれていた、怒りを覚えたが静かに突き止めをさした。

残心を終え負傷した箇所をみるも軽い歯形がある程度で、防具を貫通所か傷も付いていなかった。

狼型の魔物はグレイウルフといい連携して襲う初心者キラーだ。ドロップを回収していると見慣れない黄色い水晶を見つけアルに鑑定を頼む、結果はスキルストーン初級攻撃：ソニックアタックで、初めて見る念願のスキルストーンを手にはガッツポーズを決めた！

ソニックアタック、剣士系の初級技で中距離に斬撃を飛ばして攻撃できるらしい、何だか異世界っぽいぞ！早速修得しよう。

スロットの付いている剣にスキルストーンを使うことに決めた、スキルストーンとファルカタ・ウルフを重ねて微量の魔力を注ぐとス

キルストーンは溶けるように消え刀身に紋様が刻まれた、紋様は三日月と風がモチーフのようだ。

アルに確認してもらおうと確かにスキルが付いているらしい。早速使いたくなり木に向けてソニックアタックと念じ剣を横風ぎに振ると5mほど先の幹にザックリ斬撃の後がついた。

これでまた戦術に幅が出来る、だがこんなに凄いスキルのある剣士系の職業が羨ましく思えるよな！。

その後直ぐには5階層まで降りず俺は魔物にソニックアタックを振るい無双して遊んでいるとアルに冷めた目で睨まれ大人しくなりました。

これに属性乗せるとどうなるのかワクワクです！エレメントはレアらしく手に入り難いので残念です。

2話（後書き）

基本ソロな主人公には複数と戦う手段がいろいろありますよね。
人恋しく成って街に行かないのにも理由があります。
次回何かが変わります！

3 話（前書き）

短いですが転換点になります。

3話

階段での休憩中アルにレベルを鑑定してもらうと、基本レベルが9になっていた、1日で結構上がるんだ。と言うと迷宮探索は複数人でするもので、俺の様に低レベルなのに一撃で魔物を倒すような人は居ないらしい。

ああー、ヤツパリチートなんだと納得しつつ、今の自分を一般人と比べるとどれ程度か聞くと、レベル53位のステータスで、今存在する探索者のトップと同程度とか、どうりで疲れにくいし強い筈だと納得。

実際迷宮適正レベルは階層×2なのでレベル的には9の俺には丁度いいはずなんだが、何か調子が狂ったきがした。

休憩を終え5階層に入り探索を再開すると直ぐに茂みの奥から一匹の緑色の子供の様な魔物が現れた。

そう、ゴブリンであるスタボロの汚ない布切れに片手に棍棒イメージどうりで逆に焦りを何故か感じながらも剣を抜き構える。奇声をあげ棍棒を振り上げた襲いかかって来たが、振り下ろされた棍棒を剣で掬い上げ隙を作り胴体薙ぐとあっけなく絶命した。ドロップは棍棒と大きめの赤い魔石だった。

その後何回かゴブリンと遭遇し倒したがドロップは赤い魔石が共通でゴブリンの持つ武器や防具も残るようだ、しかし錆びていたり壊れていたり状態が最悪な物ばかりだった。

ソニックアタックを手にいれてから戦闘が楽になったが、気を引き締めてやらないと知らない怪我をしそうで怖い、不死身とは言え

痛いので嫌いですから。

5階層に来て初めて見る素材も多く採取しているとアルに声をかけられた。

「コウ、近くで戦っておるもの達が居るようじゃ、濃い血の匂いもするの、どうする?」

「あまり人とは関わりたく無いのが本音だけど、支援が仕事だもんね、ヤバそうなんですよ?」

「ああ、何人か戦闘出来ぬようじゃし、敵の数も多いの、行くのか?」

「急ごう、どっち?」

駆け出したアルに付いて走ると、茂みをいくつか越えた先で若い男女の声とゴブリンの奇声が聞こえた。

まだ距離は有るが状況を見ると立っているのは人が3ゴブリン7と圧倒的に不利だ。

速度を上げ駆け抜ける、アルに弓を持ったゴブリンを処理した後、人のフォローを頼み戦場に飛び込む。

ソニックアタックを放ち直線に重なった二匹のゴブリンを倒し、「助太刀するからしゃがめ!」大声で叫び三人が反応するのを見計らいもう一度ソニックアタックを三人の後方から放つと密集していた三匹に攻撃が当たり二匹を倒し、もう一匹の腕を切り飛ばした。残る三匹を仕留めるために探索者を飛び越え躍り出ると突然の出来

事に固まった一匹を切り伏せリーダーと思われるボロい兜とプレートアーマーに錆びたファルシオンを持ったゴブリンをシールドで殴り無傷のもう一匹を突き刺し殺す。

殴られ吹き飛んだリーダーが起き上がり叫びながら向かって来たが、斬撃をシールドで受け流しリーダーの首に突きを放ちそのまま薙ぎ首を落とす。

腕を切り落としたゴブリンを探索者の男が倒し戦闘は終わった。

大丈夫かと声をかけ、振り返ると倒れた二人の傍で見知らぬ銀髪の女性が男女一人ずつの負傷者の手当を行っていたが、腕輪から黄色ポーシヨンや包帯、解除薬をだし応援に駆け寄る。

倒れた二人は毒にやられており解毒し傷にポーシオンをかけて包帯を巻き仕上げにポーシオンを飲ませると顔色が良くなり呼吸もおだやかになった。

ひと安心し銀髪の女性にお礼を言うと「私だよ、アルだよ人に変身したのよ、狼の姿じゃ不味いでしょ？」

しゃべり方まで変わっていたが、綺麗な銀色髪に蒼い瞳に見覚えが、理解しても体が固まって動かない。

背後から探索者が話しかけて来るが鬱陶しい、人の姿になったアルは16 18才位で、色が白く目鼻立ちが整い、銀色髪と蒼い瞳も合わさって正に妖精、いや精霊だった。

「あまり見詰められても困ります、それに呼ばれてますよコウ？」

分かってるけど目がはなせなくて、ビクビクして体が動かないん

だよ！

あと、うしろの探索者はアノアノ五月蠅いから、聞こえてるから待てよ！

3話（後書き）

まあ、テンプレ展開と言うかお約束です。
年若い駆け出しパーティーとの出会いです。

次回は未定です、面白くしたいのですが。

4話（前書き）

今後の展開を迷った末の今回です、まとまりましたかね？

4話

突然に美少女に変身したアルに驚いてフリーズしてしまっただが、何とか冷静さを取り戻した俺は、アルに色々と聞きたい事はあるが、そう小一時間は問い詰めたい気持ちを飲み込んで。

未だ後ろで煩い探索者に対応するべく、驚きで固まった表情を解し、笑顔で振り返り3人は大丈夫だったか？と問いかけると、探索者は一瞬ビクリと身を固くしたが、たいした怪我も無く、ゴブリンから助けたことにズイブ丁寧なお礼を言われた。言われなれない丁重なお礼の言葉に居心地が悪いなあ。

3人からお礼攻めに遭って困ってしまい、自然とアルに視線を向けるが、いい笑顔で微笑み返されただけで、俺に声を掛けて場の空気を变えて欲しかったのだが上手く伝わらなかったようだ、マダマダ俺たちはアイコンタクトで通じ合える関係では無いようで少し凹むが、まあ出会って一ヶ月だし仕方ないか。。。でもチョツと寂しいな。

お礼と治療費を出すと強く言われたが、拒否すると色々ごねられたので、妥協案として先ほどの戦闘で獲たドロップアイテムを全て俺が貰うことで一応納得してもらった。

ドロップアイテムの中にスキルストーンが一つあったり、ゴブリンの装備品も結構あったのでドロップを全て渡してくれるとは思わなかっただけに嬉しかった、こいつらはキットいい奴等なんだろうと思う。

いつまでも倒れている2人をここに置いておく訳にも行かないので、

場所を移動し迷宮の壁側の開けた見通しの良い場所で休むことにする。出会ったばかりだが助けたからには2人が起きるまでは一緒に行動すると言うと遠慮された、迷宮や街の事も一度は話を聞きたかったので、素直に話をしたい事を伝えようと不思議そうな顔をされた。変に誤解を受けたくはないので、簡単にアルと俺との二人旅で今日この国について迷宮に潜った事を説明すると納得してくれたように一緒に休憩しようとも言ってくれた。

壁に寄りかかるように座ると、探索者の女性がお茶を渡してくれて改めて御礼を言ってくれたが君もあの状況なら同じ事をするでしょ？と言うと、そうですね、私にも力があればキット助けます。と答えてくれたので今後他の誰かを助けてあげてね。とカッコをつけてみた、スルーしてくれると良かったのだが目を見開いたあと言い笑顔で、「はい、キット！」と言われてこっちがドキッとしてしまったよ。

探索者の女性エルフで、やはり金髪碧眼の美少女さんでした、戦士系の職業のようで分厚い革の鎧で身を固め片手剣と盾を持っていた。

エルフの女性と話していると大柄な人間の男性がやってきて話に加わるがエルフの女性と同じ答えを返すと、「あんだ、いい奴だな！本当に助かった、倒れている2人は駄目だと諦めかけていたんだ、みんなを代表して礼を言う。」と言われた、彼がリーダーのようだなー、何て思っているとアルともう一人の探索者が倒れている二人のもとから戻り、自己紹介をする事になった。

探索者のパーティーのリーダーは人間の男性で名前はアルドと言いい、頑丈そうな銅製のプレートメイルに体が隠れるぐらいの木と金属で出来たタワーシールドに、グレイブと言われる長い柄の先に幅広い刃が付いた槍装備だ。重量感がありタフそうだが、MHの自分の

キャラに似ていて親近感がUPしたw

サブリーダーはエルフの女性で名前はリードと言い、アルドと同じ戦士職だが生粋のタンカーと言うわけでは無いようだ、銅製の盾と短めのグラディウスを持ちアルドをカバーしつつ攻撃する感じなのだろうと思う。

三人目は獣人の男性で長身だがスラツとした細マッチョのイケメンで名前はエロイと言う、ぷ、ぷつぶ、聞いた瞬間吹いてしまいそうになったが何とか耐えた！イケメンなのにエロイは無いわ。

素敵な獣耳と尻尾があるが男では萌えないぞ！決していいなあ、モフモフの魅力に負けてなどいない、俺は女の子が大好きだと叫びたくなった。

そんな事はさておき、エロイは格闘職らしく軽そうな薄手の革のジャケットにパンツ、脛当てとつま先に金属補強がされたブーツを履き、両手に鉾の付いた革の指ナシグローブをしていてまるでロツクミュージシャンのようでシックリと似合っていた。そう言えばもと総理の孫に似てるの居たな、エロイ彼はアタッカーなんだろうな。

倒れている2人のうち男性はカイルという人間の回復職らしく、今回の戦闘で最初に彼が後ろから現れたゴブリンの弓兵にやられた事でパーティーが混乱してしまっただけらしい。ローブに穴が空き血に濡れた姿が痛々しく彼が一番重症だった。灰色のローブと木製の口ツド装備がいかにヒーラー職と言った感じだ。

最後の女性は獣人で名前は「ミイシャ」と言う可愛い名前。のまだ幼さの残る女の子でエロイの妹らしい、弓を使うスカウト職らしい。エロイよりも丈夫そうな革鎧を着ているが毒に対する抵抗が低かったのか、戦闘不能におちいった様だ。

自己紹介を終えた俺たち5人は、俺の旅の目的（本当の目的ではなく、世界中の迷宮で商売をしつつ迷宮で採取など行い探索する、と言う事にした）やアルド達パーティーの事、迷宮の事や消耗アイテムに

付いてなど取り留めなく話し、色々と知ることが出来たが。

アルド達は俺の装備が気になるようで、フルフェイスやファルカタにシールドの事をしきりに聞いてきたので、自作とは言わず仕入れのツテがあると答えておいた。アルド達にも良い品があれば優先的に声を掛けるから是非店で買ってくれとも。

仕入れた情報の中でも有用だったのは、鑑定スキルのスキルストーンは街では少数ながら流通している事や、探索者や冒険者の共同体ギルドの事、ギルドでスキルストーンは取り扱われており、オークションで購入出来ることが大きかった。

一度街に行く必要があるようだ、あまり人の多い所は避けたかったがアイテムの相場や品揃えに、一般に流通する武器や防具の種類やクオリティー等もサーチしておこうと考えていると、倒れていた2人が起き上がりヨロヨロと言った感じで近づいて来た。

その後、アルド達は今日は一度迷宮を出て街に戻るそうなので此処で別れる事になり、5人そろって銅の羽で迷宮から脱出していった。

アルと二人になると寂しく感じたのは、まだ自分が人恋しく割り切れていない事を思い出させ気分を憂鬱にさせる。

俺が寂しそうな顔をしてたのか、アルが慰めてくれ今度街へ遊びに行くことになった。

いい時間になったのか空腹感を感じ俺たちも一度ホールに戻り今

日は休むことにした、亜空間でアルに変身の事を言っ てなかった事や、他にも隠してることは無いかと聞いたが、美女の姿でドキドキするような妖艶な笑みを浮かべながら耳元で「ひ・み・つ」と言われたら黙るしかなかったです。

アルに俺がドキマキしうろたえる姿が面白かったのか、気に入ってしまっ たのか解らないが、当分は人の姿でいるようです。

モフモフと一緒に寝れなくなるのが残念で泣きそうです。今のアルと寝ると襲うのは確実なので今日から俺はソファで寝ます。

そう伝えた時のアルの意地悪な顔と台詞は悔しくて忘れません。

「一緒に寝てくれないの？寂しいな」と俺と一緒に絶対寝ないの解ってて聞くのはどうよ？ここでも女性とは思わせぶりで、理解できない猫みたいな生き物なようです。

4 話（後書き）

探索者紹介です、今後絡んで行くことが解る面白みの無い回になったかもしれません。
直には街に行かず、後数話ウロウロ探索したりです。

5 話（前書き）

探索とお出かけの下準備前編？

アルは着る物にはこだわりがあるようです。

5話

昨日は初戦闘や探索者との出会いなどで気分が昂っていたのか、ナカナカ寝付くことが出来ずにいるとアルがベットから起きてお酒を持ってきてくれた、お酒に酔う感覚は好きでなく、飲むとスグ眠くなる体質の自分にはもってこいの睡眠導入剤だった、飲みながら色々話そうと気を使ってくれたのだろうが10分程度でまぶたが重くなり夢の中に落ちた。

なれないソファで寝たためにアツチらコチラこり固まった体をほぐす為に大きく伸びをして、柔軟体操をしてると、アルも起きたように寝癖の付いた頭で大きなあくびをしながら体を伸ばしてた。その姿が可愛すぎて凝視していると、視線を感じたのか首をかしげながら「おはよ、どうかしたの？」と聞かれたが正直に言えるはずも無く、「寝癖すごいね、直しておいでよ。」と何とか怪しくない程度に返すことができた。

アルが身支度をしている間に今日はどうかと考える。

昨日の話では、このアフレッドの迷宮は25階層まで探索は終了しているようだが、取りあえずは昨日の5階層をクリアし、今日中に10階層の転移ポータルまでは探索出来ればいいかな、定期的に構造を変える迷宮とは言え、昨日の今日では変わらないので、アルにナビゲートしてもらい極力戦闘を避けながら先に進もうと決めたが、アルの装備と武器、後俺の長柄を午前中に作るのかな？探索が午後からだと時間が足りないか、どうするかなと迷いながら、二人になって初めて横に並んで朝食を食べて出立の準備をする。昨日ホールまで戻らなきゃ良かったと思っているのは秘密です。

装備と道具を整える為に、アルと相談しながら今日は一日工房に

籠ることになりました。

どんな装備がいいの？と聞くと昨日知り合った獣人の少女のような感じの動きやすい革の鎧と弓と矢があれば良いという事なので、参考資料を見ながら設計とデザインを詰めていく。

女性の服選びは長いとは知ってもいたし経験もしてましたが、午前中に全体が決まる事はありませんでした、とりあえずと候補の一つで妥協してもらいます。人の姿になったアルはとても魅力的なのですが、姿に精神が引つ張られるのかとても幼い感じです。昔を思い出しそうなので思考を止め昼食にする事にしていったん工房を後にします。

昼食と休憩で午前中に疲弊した精神力を回復させ、工房へと戻り錬金を始めます。

まずは頭からです、軽く動きやすいそれなりの防御という事で、「無難に厚手の革製帽子かな。」と聞くと答えはNOでした、考えた結果今回作るのは鉢金や額当てと言われる物にします。有名なのは狐を体に飼っている少年忍者の漫画のアレです。

用意するのは綿の生地と銀のインゴット、そしてクロム合金、金属部分は少量なので多少重い金属でも問題はないかな？額を覆うような形のクロム合金の板が銀を糸状にして編みこまれた薄紫色の綿の生地に留められた額当てが出来た。

金属部には草花の意匠が細かく彫金されておりナカナカの見栄えと思う。

上半身と下半身の装備はレザーシャツ+レザージャケットで胸と肩に鋼の鉄板で補強を入れる、色は白く、厚めの牛革と軟らかくなめしたヤギ革に鋼である、セットの太目のベルトには鋼の薄い板を付けて、少しでも防御力をあげる。今日だけでは付与魔法は武器に

しか掛けられないので、苦渋の決断です。

手足も革製のグローブとブーツにしたかったのですが、アルN Gが入りブーツではなくひざ下まで編み上げるサンダル？みたいな物です、グラディエーターサンダルもどきです。脛の部分には細かい金属板で補強し鋸を沢山打った口ツクな仕上がりになりました、色は希望で黒です。茶色が似合うと思ったのですが乙女心は難しいです。

3時間あまりの時間を掛けて錬金し終え、休憩を入れる俺の横で出来たばかりの装備に身を包み嬉しそうにはしゃいでいて癒された、これだけ喜んでくれたなら苦労した甲斐がある。

いよいよ武器の錬金だ、防具より武器の錬金の方が気合が入る。弓も槍の初めて造るのでなおさらだ、アルの武器はショートボウかな？と思っていたのだが、これもアルのご希望によりロングボウになりました。

木材と金属の複合素材で弱い力でも引けるように構造を工夫したコンポジットボウにした、バネ鋼の厚さの判断に苦労したが、シンブルながら金属部分に彫金を施し繊細で美しい仕上がりとなった。矢は鋼と木材を錬金すると10本単位で造れるようで5セット用意して、矢を入れる矢筒も革と銀で見た目良く仕上げる、矢筒には20本矢が入る仕様です。

最後はいよいよ自分の武器だ、形は最初から決めてある、十字槍はバサラの真田と言えば分かって貰えるだろうか？、突けば槍、薙げば薙刀、打てば棍の多様な攻撃が出来るハルバートの日本版と言えるのではないだろうか、総長さは2m40cmで刃部分は60cm、刃と石突材質はタングステン合金3kgと柄はアルミ合金3kg

gの合計6kgで握りには青く染め上げた鮫革と麻紐を巻いて滑り止めとする。柄は骨のような構造で強度を上げ軽量化に勤めた満足の行く一品だ。

その後付与魔術を行うために休憩と瞑想して精神を高めてから、付与魔術で、弓に命中性能向上と槍には剣と同じ攻撃速度上昇を掛け仕上げる。

基礎レベルと錬金レベルが上がったが、付与レベルは上がらなかった。

以下製作した品を箇条書きで

「兜」紫銀の額当て

グレードC下級

(防御力+28 スキルスロット+1)

「上防具」ホワイトレザーコートセット+

グレードD中級

(防御力+26 スキルスロット+1)

「下身鎧」ホワイトレザーホース

グレードD中級

(防御力+25 スキルスロットなし)

「腕具」ホワイトレザーグローブ

グレードD中級

(防御力+25 スキルスロットなし)

「足具」ブラックレザーサンダルブーツ +
グレードC下級

(防御力 + 30 スキルスロット + 1)

「弓」メタルコンポジットボウ +
グレードC下級

《銘》鷹：攻撃命中率上昇 + 12%

(防御力 + 33 スキルスロット + 1)

「槍」十字の蒼槍 +

グレードC中級

《銘》隼：攻撃速度上昇 + 5%

(攻撃力 + 56 スキルスロット + 1)

5 話（後書き）

話は進みませんが製作が重要なこのお話

こつ言った場面は減らしたり省略する方がいいのでしょうか。
ご意見を聞かせて頂くと参考にさせていただきます。

6 話（前書き）

休日仕様で長文書いて見ました。
一日を書く結構ながくなります。
構成と誤字修正しました。

6話

装備の充実した俺達は朝から迷宮に潜り、10階層を目指すことにする。実際は採取すると今日は行けて9階層前後になるかもない、とも思うが。

ゴブリンから手に入れたスキルストーンはレジストポイズンと言う常時発動スキルだったので防御が心配なアルのサンダルにセットしておいた。アルは真新しい装備に全身を包み気合十分と言った感じで朝から元気だ。

装備の点検を行い武器を身に付けて緩みや不備が無いかと確認し終わるとアルに声を掛け階段を下りていく。

前回に到達した5階層までは、2人とも余裕があるので邪魔なモンスターだけを倒し急ぎ足で向かう事にした。

1階層から4階層までで出会った魔物は、アルの弓による正確な狙撃でこちらに気付く事無く迷宮へと還っていく。

アル無双でした、俺だって新しい槍を振るいたかったのに、40体ほどの魔物を狩り満足げなアルを見ていると、やはり狼で狩猟本能があるんだと思う俺でした。

三時間ほどで5階層にたどり着くハイペースな探索で少々疲れたが、予定どおり今日は行けそうかな？早めの昼食を採り一度緊張感をリセットさせ、改めて5階層を探索しはじめる。

この階層でも鉱石は採取出来なかったが、アルド達探索者から10階層から荒野に迷宮の構造が変わり所々に採掘ポイントがあると聞いていたので、キットその通りなのだろう。

遭遇するゴブリンの数は一度の戦闘で2〜3体程度で、ゴブリンリーダーの様な存在や組織だった動きをするものは居なかった、考え事をする余裕を持ちながらゴブリンを相手に十字槍を振るい迷宮内を駆け抜ける、ゴブリンでは突こうが斬ろうが一撃で倒すことができる。

採取も控え目ばしいドロップも無く、赤色魔石とゴブリンのガラクタ装備だけが貯まり1時間あまりの

ハイペースで5階層の探索は終え階段を降りていく。

6階層で出会った魔物はゴブリンと動物型の混成部隊で動物との連携を持って襲い掛かってきたが、アルも参戦すると瞬殺でした。襲い掛かる狐や狼を俺が槍で対応すると、後ろからアルがゴブリン達を狙撃し排除する。俺が近中距離を担当しアルが遠距離のこの組み合わせはなかなか効率が良いシツクリ来るが、未だに一撃で倒せる相手だけでは深い連携の練習にはならないが。

（この魔物の毛皮では鎧は造れないなあー。）早く何か創作意欲を刺激する素材に出会いたいです。

その後も快調すぎて不安になるぐらいに、順調に探索は進み5時間後には9階層に辿り着いた俺達は疲れを癒すために、一度亜空間に戻り夕食を食べのんびりとくつろぎ休憩を取る。

迷宮内は常時同じ明るさで、体内時間の感覚が大いに狂う。

しかし昼夜関係なく人の営みが行われている現代から来た俺にとつては慣れたものだったが、アルにはキツイようだ。

「腕時計を渡したほうがいいかな？基準があればずいぶん精神的には楽になるはずだし。」と思う。

休憩中にアルと話し合い今日は10階層を踏破し11階層前の転

移祭壇に登録するまで頑張ることにした。敵に襲われる事の無い空間で休めるのは他の探索者には無いアドバンテージだ、探索効率と時間が圧倒的に違う。

9階層で新たな魔物が現れた、オークだ醜い顔に太った体、知能もある程度あるのか武器や防具もゴブリンの物と違い程度が良く手入れされているようだ。

3体が一組で動いている動きも知性を垣間見る事が出来、ゴブリンと明らかに違った。

オークに気付かれる前にアルが気付き、先手を取って戦闘になった。

まずアルが盾を持ったオークの頭を狙い矢を放つが頭骨で滑ったのか刺さらずオークの頭の肉を大きく裂いて何処かへ矢は飛んでいった。狙われたオークは膝をついてうずくまり2体のオークはこちらに気付き何かを叫び向かってくる。

一体は槍を腰ために構え走り、もう一体は手斧の振り上げ襲い来る。

アルに槍持ちへの牽制を頼み、俺は2体のオークを向かい打つべく前にでる。アルの矢が槍持ちの肩を射抜き動きが鈍ったのを確認し標的を槍持ちに絞る。

オークの槍を左側に払いのけ、体勢を崩したオークの喉に十字槍を突きたて穂先を捻りこみ素早く引き戻す。

斧持ちが迫るが、引き戻した槍をひるがえし石突きでがら空きの胴を目掛けて突きを放ち動きを止め、そのまま槍を振り上げオークの顎を打つ。

仰け反り隙だらけのオークの胸に十字槍を力いっぱい突き放ち止めとする。

俺が二体のオークと戦っている後ろでは、冷静にオークの動きを見極めたアルが盾持ちに矢を放ち仕留めていた。

ドロップはオレンジ色の魔石とオークの牙だろう物と武器、防具だったので回収しつつ、終えたばかりの戦闘を振り返る。

（一人だと三体で連携されると本当にやっかいな相手だったな、盾で受けられ槍に突かれれば斧を受け止めれないだろうし。一人じやなくて本当に良かった。）と思いアルに感謝の言葉を言うと、アルは首をかしげ「何が？」と不思議そうにしていた。

オークは連携と力は厄介だがスピードが遅く対応の難しい魔物ではない、たまに防具や骨で攻撃が滑るので、気を付けなければいけなかった事を思い出させてくれる魔物だった。

その後も3体か4体のオーク小隊に6度ほど相手にし無傷で制圧する事が出来たが、意外と時間が掛かり軽い疲労感を感じながらも10階層へと足を踏み入れる。

10階層にはゴブリンとオークの混成部隊が5体か6体で小隊を組み、数と連携が厄介だったので槍を収納しファルカタを抜きソニックアタックのスキルを使い効率を重視した戦闘に切り替えて探索を進める。

この階層でスキルストーンを3個も手に入れたがアルに鑑定してもらった余裕もなく何のスキルかが気になるが探索に集中して先を急ぐ。

喉が渴き軽い疲労を感じたのでアルと二人黄色ポーションを1本づつ飲むと体が軽くなるのを実感できる、だが味は、、我慢だ。実際に効果があるもんだな自分が造っただけに効果があるのか疑っていたが。

10階層もそろそろ終わりかと思っていたらアルが敵の存在に気付いた様で、袖を掴み引き止める。

あるの視線が茂みと木々の奥を見据えたので、そつと音を立てない

ように索敵を行うと、11階層への階段前に今までのオークより一回り大きい重装備のオークとその取り巻きが4体陣取っていた。

この階層のボス？なんだろうか、ボスオークの持つ剣は業物のようで刀身が美しいクレイモアであった。

索敵を終えアルと作戦を立てる、話の中で多分行けると思うが今のレベルの確認をすると、基本レベルが18、鍊金レベルは25付与レベル2と基礎レベルがずいぶん上がった。

「これなら槍と剣の二刀流がいけるか？」と思い盾を仕舞い槍を出し交互に素振りをする、重みをほとんど感じなかった、これなら行けそう。

保険でアルにスキルストーンの鑑定をしてもらい3個のスキルを把握すると、「パワースイング」「クイックムーブ」「オーバーウエイト」の三種で、当たりは攻撃スキルのパワースイングだけかな？パワースイングを十字槍にセットし一撃の重さを増し、グローブにはオーバーウエイトをセットして持てる重さの底上げする（全身の筋力微量上昇）。

アルにはレザーコートにクイックムーブをセットし回避率を上昇させた。

ボスオークと取り巻きの構成は、ボス両手剣、盾持ち×2、槍×1、弓×1だ、作戦はアルの弓と俺のソニックアタックでまず槍持ちと弓を潰した後に、アルがボスに牽制の矢を放ち俺が盾持ち二体を処理した後にボスオークを退治する流れで行くことになった。

装備の再確認と作戦をもう一度確認した後、ボスオーク達に気付かれないようにオーク達の左側面へと移動して先制攻撃を仕掛ける。スリーカウントを数え終え、アルは弓持ちに矢つがえユックリと引き絞ると矢を放ち、俺は槍持ちにソニックアタックを放つ。

先制攻撃は完璧に不意を突けた様で、矢は弓持ちのコメカミを貫き絶命させ、俺のソニックアタックは槍ごとオークの首を跳ね飛ばす。

二体のオークが力無く崩れ落ち、ボスオークたちが硬直した隙を狙い左に待機していた盾持ちに向けてもう一度ソニックアタックを放つ、飛ぶ斬撃は盾を構えていないオークの体を深く傷つけ体勢を崩させ、左手に持った槍で首を刺し止めをさす。

ボスオークと盾持ちが持ち直し、武器を構えて襲い掛かろうとするが、ボスオークの側面にアルが放つ矢が突き刺さりボスオークを怯ます、その隙に俺は槍をオークから引き抜き、盾持ちが振るった斬撃を剣で受け止め、槍のパワースイング発動させてオークの足元を払うと、予想以上に威力があったのかオークの右足の脛から先を斬り落とし苦痛に顔を歪ませたオークを転ばせる。

油断無く起き上がれないオークの頭に剣を振り下ろすと鈍い音と共にオークの頭が石榴のように割れ血飛沫と白濁した脳漿がはじけた。

オーバーウエイトの効果は結構な当たりだったようで、腕力がズイブン上がったようだ。

取り巻きを全て無力化し終えたのを確認したのち、距離を取りボスオークを見ると、アルの放つ矢をクレイモアを盾にして致命傷は避けているが、肩や足に無数の矢が刺さっている。

（いい腕してるよ、アルはホント連射速度も速いし、謎が多い精霊だな。）なんて考えながら観察すると。

完全に動きを封じられているボスオークは俺が眼中に入っていないようで隙だらけだ。

そんなボスオークの背後から槍によるパワースイングで腕を打ちつけクレイモアの防御を崩すと、アルの矢が胸に刺さる。虫の息のボスオークに止めを刺すべく槍を捨て剣を両手で持ち渾身の一撃で後

るから首を撥ね戦闘を終えた。

ボスオークはかなりタフだったが、焦る必要は無い魔物だった、
だがもし攻撃を受けていたらどうなっていたのだろうか？パワーもある
ようだったし。

5体もの魔物が迷宮に還る様子は何とも不気味に感じる。
残ったドロップアイテムも多くボスオークの残した魔石は握りこぶ
しより大きな黄色い光を放つモノでスキルストーンと間違えそうだ
った。

この戦闘で新たなスキルストーンは獲ることは出来なかったが、
ボスオークのクレイモアは良質の鋼で肉厚も厚く「ストライクアタ
ック」のスキル付きであった。

ナカナカ男心をくすぐる得物だが、俺は両手剣を使わないので店
で売るか街に行った時にでも軍資金に替えようかな？と思う。

戦闘で昂った感情がまだ収まらないが先へと進む。

その後階段を降りるとストーンヘイジのような転移祭壇があり、中
央の石に触れると石が一瞬輝き消える。
あっけなかったが登録できたようだ。

これで今日の探索を終える事が出来る。

緊張を解くと体が重く感じられホールに戻らず今日はここで亜空間
に帰る事にした。目標を達成した実に充実した一日だった。

6話（後書き）

何とか10階層踏破です。

次回は街へ行こうかと思っています。

7 話（前書き）

街に何とか行ける？
文章構成を修正しました。

7話

10階層までの探索を終えて亜空間に戻り夕食を食べた後は、ユツクリと風呂に浸かり今日一日の疲れを癒す。

アルが「一緒に入ろうか？背中流してあげるよーw」とカラかつて来るのにイラっとするのは、お風呂の時のお決まりになりつつある。

「広いお風呂なら是非頼むよ。」と返すと、頬を膨らませつまらなそうにベットの上で足をバタバタさせていた。

自分は戻ってスグお風呂に入って寛いでいたくせに、と思いながら風呂に入り、今日の疲れからかスグに寝むくなり相変わらずソファーで泥の様に眠りに落ちた。

ドロップ品の整理や戦闘の反省などは全て明日へ先送りだ。

いつもの電子音と共に俺が目覚めると、アルが朝食の準備をしてくれていた。

人型に成ってから何かと俺の世話を焼いてくれるのが嬉しい、料理も食べなれた物では無いが美味しいしドンドンこの生活に馴染んで来ている自分が面白く、自然と口角が上がってしまう。

「アルおはよう、今日も早いねー、今日の朝はなに？」そんな言葉で始まる一日がとても楽しい。

二人並んで朝食を食べながら今日の予定を話し合い、探索で得ることの出来た品の整理と消費アイテムの練成、後街へ行く準備を行う事になった。

俺もアルも街へ行くのは初めてで、アルは与えられた知識程度でしか人族達の暮らしや文化は知らないらしく、自分の知っている事が合っているかもいまいち不明らしい。

ずっと別の空間？次元みたいな所で生活していて俺の元に来てくれたのは何故かと聞くと、単純に「面白そうだったから？」らしい。そんなアルの驚きの新事実が発覚したり、街に行くのが不安になったりと朝から賑やかだった。

さっそく倉庫でドロップ品の整理をしようと倉庫に行くと、ドロップアイテムや採取した素材が結構な量が素材別に積み上げられていた。

いまいちココのシステムが理解できないのだが、たとえば薬草は薬草ばかり集められるのに、装備品は種類がナイフだろうが剣だろうが武器の大きなくりで分けられている。

ゴブリンやオークのドロップ品の武具の整理がめんどくさいなあー、と思いつつも街でとりあえず換金するためにも綺麗に手入れするか錬金し直すかしくはなくてはならないだろう。

本当にこの世界は不思議で、武器防具が時代背景や地域関係なく存在するのに、元の世界での西洋から中東辺りで発達してきた様な武具しかなく、中国やインド、日本らしい武器はまだお目に掛かったことがない。

街では普通に流通しているのだろうか？それを確認するのも街へ行く理由の一つだ。

（無い様なら造って広めてやる！、トンファーやヌンチャク、方天画戟とか鎖鎌も面白いな。）

そんな事を考えながらまずは武器の分類を進めていく、ナイフやショートソードが多く次に棍棒、ロングソードに槍、最後に弓といった感じで、七割方が鉄製の鋳造品だった、鋳潰してやろうと思うような粗悪品ばかりだ、残り二割の品が鍛造品や鋼を使った品で、残る一割が弓と言った感じだ。

粗悪品を前に鍛冶錬金で鋳潰せないかと悩んでいたが、アルも今

日は居ないし一度試してみる事にした、失っても惜しく無い品ばかりだしいいよね。

粗悪なナイフを一つ手に取り鉄の塊をイメージし魔力を込め、鍛冶錬金を発動させると小さな鉄の塊が転がり落ちる、持ち手の木製部分は木片になっていたし成功したようだ。

テンションが上がった俺は、不要な武具を纏めて積み上げ錬金すると、大きな金属の丸い塊と木材に変換されたが、金属はマーブル模様でよく見ると鉄、銅、錫などが混ざった塊になっていた。木材も集積材みたいに色々混じったものでした。

集積材は解るし許せるが、直径1mほどあるこの金属の塊は問題だ、、、これも分離は錬金術で出来るよね？今度から素材別に錬金しようと心に決め、今はこの金属の塊を放置する事にした。

残った武器は補修、メンテナンスを錬金術で施す事にし一つ一つを丹念に調べるのだが、この作業も鑑定スキルさえあれば一瞬で終わるのでは無いかと思うと、鑑定スキルがいち早く欲しくなるのです。

程度の良い武器は鍛造ナイフ2本、鍛造のショートソード、良質鋼のバスターソードと鍛造製の良質鋼のショートスパアが2本だ。どれもが拵えや意匠など飾り気のない量産武器だが、どれだけの探索者の血を吸ったのか血や脂でくすみ、刃こぼれや錆びが浮いているモノばかりだ。

この7本とボスオークのクレイモアに鉄製のプレストメイルは工房に運び込み、消耗品の材料は纏めて箱にいれ運び本格的に錬金に取り組む。

7本の程度の良い武器には消耗する前の姿を思い浮かべ錬金を施

し仕上げ、クレイモアは少しバランスが悪かったので、重心を手元に下げて柄の握りも少し長く細く錬金し直し、おまけで二匹の絡み合う蛇の意匠を刀身に刻む。スキルが失われないか心配だったが、チヨツとした改造は平気な様だ。

アルの矢で穴の空いたブレストメイルは周囲の厚みを薄くすることで補い穴を塞ぎ、細かな傷を消し仕上げた所で正午になり昼食に戻ると、アルはベットの所で前の世界のメンズファッション誌やタウン誌を並べ読みふけていた、今日は完全なオフモードのようだった。

（今日は何も言わずに、そつとしといてあげよう。）と決めた。

午後からは消費アイテムとアクセサリーの試作をする事にし、アルに声を掛けて工房に戻る。材料の入った箱から薬草と魔石を通りだし消費した黄色ポーションを補充、増産しもう一つ上の高級ポーションを作る為に薬草とオレンジ色の魔石と迷宮で採取した白いキノコを用意する。

鍋に入れて錬金すると白い液体が鍋を満たした、効果は黄色ポーションの3倍の回復力がある優秀なポーションだ、相場は幾ら位なのだろう？

その後も毒消しや麻痺解除などのポーションを錬金し商品在庫を増やす、街でお金が入用になれば売りさばく予定だ。

消費アイテムも十分に作ったので、倉庫から銀のインゴットと金のインゴット各1kgとルビーとサファイア、アメジストのルースを何点が用意し、工房で指輪とブレスレットとアンクレットとネックレスのデザインを羊皮紙に書き、（アルも居ないことだしアクセサリーでも造ってプレゼントしようかな？）と考え女性用のデザインを追加する。

ナカナカ納得の行くデザインが仕上がらず時間だけが過ぎてゆく、3時間あまりたつてヤット納得の行くデザインが3点出来て、指輪とネックレスと女性用のネックレスを鍊金し仕上げてゆく。

指輪は幅広のデザインで、ベースに銀を使い全体に唐草模様を金で施した、そして仕上げに中央にルビーを留め完成だ。

石をサファイアに変え、金と銀を入れ替えたデザインの物を女性用としてもう1点造った。

アルとのペアリングにしたのだが少し恥ずかしいな、アルの指のサイズを知らないので後で調整し付与魔術を施そう。

自分用のネックレスは銀の太めのチェーンをアルには金の細いチェーンを先に鍊金しペンダントトップは別に造る、東洋龍の頭をモチーフに口にアメジストの玉を咥えたデザインを銀で、アルには金で狼の頭をモチーフに、口にはアメジストの玉を龍と同様に咥えさせたデザインだ。

鑑定できないのではつきりとは判らないが、納得の行く出来で手に取り何度も色々な方向から眺め悦にはいる。

ペンダントトップに魔力抵抗を付与し仕上げ、角ウサギの毛皮で作った巾着に指輪とネックレスを入れアルへのプレゼントとして用意した。

自分用のモノはもう装備済みだったりする。

人差し指にリングを嵌め、リングの仕上がりをもう一度確かめ今日の作業を終える。

プレゼントを受け取った後のアルのリアクションと明日出かける街が楽しみだ。

7 話（後書き）

お出かけの準備で終わりました、、、、
街へ何の証書の無く入れるんでしょうか？その辺りの設定があいまいです。

8 話（前書き）

外に出ると何かに巻き込まれたり、何かが起こったり、
街は遠かったです。申し訳ないです。
文章構成と一部表現を修正しました。

8話

緩やかな丘陵地帯をアルと一緒に走り抜ける、額には汗がにじみ頬を撫でる風が煩わしく感じるほどに焦り、ひたすらに足を前へと運ぶ。何故朝からこんなにせわしく先を急ぎ街へと続く街道をひた走るのがを説明するには3時間前に遡り説明しなくてはならない。

プレゼントしたアクセサリーに朝から上機嫌なアルの姿が嬉しく、俺自身も上機嫌で街へ向かう準備をしていると、重要なアイテムが無い事を思い出した。

工房に急ぎ倉庫から綿と羊毛生地、黒い染料を持ち出し、昨日のアクセサリーの残りの銀と一緒に作業台の魔方陣へと並べる。

何を作りたいかと言うと、旅人の必需品である外套を用意してなかったのだ。

「旅人には外套は欠かせないよね。」と独り言を呟き鍊金に取り掛かる。

出来るだけありふれたデザインで、フード付きの黒い外套は羊毛生地と綿の裏地で、留め具には銀で狼の意匠を刻んだコイン型のボタンを首元に配し、前を閉じ包まれる様に胸元と腰にもボタンを付けた。

装備と言うより衣類品なので、とりあえずは防寒や保温の付与などは今回は施さずに完成させると、足早にアルが待っているであろう部屋へと戻る。

アルは既に準備を終えておりイライラとしている様であった、ソファーに座りテーブルをトントンと指で叩いていた。

「遅いよ！何してたの？」と責められたが、苦笑いを返し外套をアルに渡し「コレを作ってたんだよ。」と答えると少し嬉しそうに立ち上がり外套を眺めていた。

「このボタン可愛いね、着てみていい？」と言われたので頷き姿見を持って来てあげると、綺麗な銀髪と黒との対比がナカナカさまになっていた。

少し全体的にラインがやばった感じもしたが、似合ってるよと笑顔で褒めるのは男の甲斐性だよね？

そんな一幕があり、亜空間から出ると銅の羽を使い迷宮の入り口ホールへと戻る。

まだ朝も早いはずだが、探索者のパーティーが3組ほどホールで打ち合わせを行っていたり、探索者相手の行商人が露店の準備などを行っていた。

俺とアルに周囲からの注目が一瞬だがあつたが、スグに視線は逸らされた。

ここでこんなに人を見るのが初めてだったので、しばらく眺めていると一組のパーティーが泉の横にある石柱に触れ姿を消した。

「おおー！」と小さく声をあげ驚く俺は、（ああして祭壇まで戻るんだな。）と疑問に思っていた祭壇の使い方に納得がいった。

ホールに出される露店が同業なのでとても気になったが、（今日是我慢だ、次回にしよう。）と自分に言い聞かせ迷宮から久々に外の世界へと足を踏み出す。

眩しく降り注ぐ日光と吹き抜ける風が心地よい、天気にも恵まれた良い日だった。

空を見上げた俺の気持ちまでも晴れ渡った気がした。

隣で眼を細め大きな伸びをするアルを見て、（アルの白い肌が焼けるの嫌だなあー、日焼け止めクリームって売ってるかな？なかったら作る）なんて関係の無い事まで考えながら、丘陵地帯を貫く様に街まで続く街道を歩き始める。

和やかに他愛も無い話を横に並んで歩くアルと交わしながら歩いていると、3つめの丘にさしかかったあたりで状況は一変する。

前方の丘の上から黒煙があがっており何事かとアルを見ると、アルは顔をしかめ苦い表情で教えてくれた。

「モンスターが人を襲ってるんじゃないかって、複数の男が2人の女性を襲っているようだよ、せっかく気分も良くて楽しかったのにな、ホント興ざめだよ。コウどうするの？助けとく？」

驚きの事実を良くある事と平然と言い、面倒事は無視しよう的な発言に驚くが、アルは精霊だし探索者を支援はすれど、一般人にまでわざわざ関わろうとは思わないのかもしれないと納得した。

自分も知り合いなら助けようとも思うが、見ず知らずの人間を助けるほど余裕は無い、だが自分の正義と信念の中に「女性を傷付けない。」と言った誓いがあるし、今の俺には力も有るので見て見ないフリはしたくなかった。

「いやいや、助けてあげようよ。知ってしまったたら無視できないでしょ？人間相手に力を振るうのは嫌だけどね。」

「アルが嫌なら丘の上から状況を確認して襲われてる2人が逃げれそうなら無視するでもいいよ？」

（ここが妥協点かなあー、）と考えているとアルから答えが返ってきた。

「駄目だったら助けるんだ、この世界じゃ当たり前にある事だよ。コウの優しいところ好きだけど、この世界じゃ辛いだけだよそんなじゃ。弱肉強食強ければ生き、弱ければ死ぬ。ってコウの世界の書物にも書いてあったよ？」

アルはどうやら明治維新を生き抜き政府に裏切られた人斬りの包帯男を知っているようです、いつ読んだの？

そんな事はさて置き丘の頂上に急ぎ、襲撃現場を確認すると一台

の馬車が燃えており、倒れた馬？馬のような生き物から無数の矢が生え血溜まりが広がっていた。

襲撃者達は全員で10人で、全員が格好を見て解るぐらいにイメージ通りの山賊であった。

女性二人の抵抗が激しかったのか3人が倒れ残りの7人が二人を囲う様に展開しつつあった、女性二人はお互いを庇い合う様背中を合わせ、お互いの死角を補いつつも囲まれないように徐々に後退しつつ、稲妻と炎の矢を手の平から山賊目掛けて放っていた。

明らかに二人は一般人では無いよね？、聞いていた魔法ではなく、今眼にした魔法は正しくイメージ通りの戦闘魔法で、感動し感激のあまり俺は放心た。

「私の知らない魔法だ、、あれって人間だよな？」とアルが呟き、俺は正気に戻り、目の前で行われている生存競争眺めている。

やはり数の暴力には敵わないのか、矢を一人の女性が受け負傷した後が無くなった様だ。

（これはもう手を出すか。）と思い、腰からファルカタを抜き構え、アルに声を掛ける。

「アル、あの女性たち助けるよ、俺が突っ込み切り開くから弓で援護と出来れば殲滅もよろしく。」言い終える前に俺は走り出すがアルは了解してくれた様で、弓を構えるアルの姿を振り向き確認すると俺は、剣を振りかぶりソニックアタックの射程距離まで無心で走る。

後ろからアルの放つ矢が風を斬る音だけを残し、俺を追い越し女性に手を掛けようとした男の頭を射抜く。

「この距離でヘッドショットとか命中力補正とか関係なく腕良すぎるだろう！」と突っ込み射程圏内に入った俺は、山賊達に飛ぶ斬撃を放ち命を刈り取る。

傷口から血飛沫が飛び、苦痛に顔を歪ませた男が崩れ落ちる様を目にし、心の奥底に封じ込めていた真つ黒な感情と怒りが溢れ何が崩れた。

何かを失った俺は口角が自然と上がり知らない内に声を上げ笑っていた、そして目の前で群れる山賊達がただ邪魔で憎く殺したくて仕方がなくなる、そして視界が暗転したかと思うと記憶が飛んだ。

気が付き最初に見たものは、正気に戻った俺を恐怖の表情で見つめる女性だった。

自分の姿と周囲を見ると、血に塗れた自分と惨殺現場がそこにはあった、首を刎ねられた遺体、腕や足を失い胸から血を流すモノ、頭を割られ白く濁った脳漿と脳をぶちまけたモノなど、到底人がする事には思えなかったが、手に持つ血に濡れた剣や返り血に染まった自分の姿が現実をつけてくる。

そんな俺の心から込み上げて来るのは吐き気や悲しみでなく、歓喜の感情であった自分が怖いと思うが、結局自分はこの事件の後も何も変わっていないかったのかと思ったただだった。

気持ちを切り替え、震えながらも俺に向けて手を翳す女性は負傷した女の子を抱き抱え底いながらこちらを睨んで目を離さないでいた。

「どうやら命は無事だったようね、あなた達運が良かったね、もう大丈夫よ。」

後ろからアルがやって来て声を掛けた。

女性はアルに視線を向け確認すると少しだけ警戒を緩めてくれたので、俺は外套の下で腕輪からポーションと包帯を出し、女性に差し出しながら声を掛ける。

「驚かせたみたいでごめんね、怪我大丈夫？」出来るだけの笑顔をおまけに付けて向ける。

「ありがとうございます、助けていただいたのに、、ごめんなさ

い！」

「いいよ、それよりその子の治療しなきゃ、コレ使ってね。」アイテムを押し付けると受け取った貰えたので俺は満足しアルの方へと足を向ける。

背後から聞こえた

「すいません助かります、セレナもう大丈夫すぐ手当するから我慢してね。」

「シルビアお姉ちゃん、私も大丈夫だから、そんな顔しないで。痛っ、、、、！」

そんな姉妹のやり取りを背で聞きつつ歩み寄ると、アルが話しかけてくる。

「さっきのコウ凄かったねー！でも派手にやりすぎだよ。私の出番ほとんどなかったしー。」とすこし拗ねた表情で言い俺は意外な反応に戸惑い

「怖くはないの？俺の事が」と思わず聞き返す。

「うん？何でコウを怖がるのよ？、迷宮の魔物も生き生きと殺してたじゃん。」アルは流石に自然界で生きる狼の精霊でした。

殺し殺されるのが、当たり前前の自然の摂理と思っているようで、その考え方は自分にとっての理解者になりえると思い、そんな貴重な相棒の存在が確認出来て嬉しく自然と笑顔になった。

「そっだよ、魔物と人の違いはあるけど、襲う者は襲われる覚悟もしなきゃね。」

「まさにこの世は『弱肉強食』とハモって笑い合える日が来るとは思いませんでした。」

そんな事していると向こうでは治療も終わったようで、笑い合う俺達にシルビアと言う女性が声を掛けて来たので振り向き対応する。

またお礼責めになるが、それは今回無視して何故襲われたか、何処へ向かうのかを俺が聞き、アルが姉妹の使っていた魔法について質

問していた。

そんなやり取りをしているとアルが急に振り返り遠くを眺め顔をしかめた。

「どうかしたのアル？」と聞くと

苦い顔のアルが「厄介事がまたくるみたい、大勢の人間達がこっちに向ってきてるよ。」といい、何者がと聞き返すと山賊達の本体がコチラに向かっていると言うので、冒頭に戻るわけです。

行き先はこの街道の先アフレッド王国首都と同じだったので、姉妹共々山賊の襲撃から逃れるためただ今逃亡中です。

ただ街にお出かけするだけだったのに。。。何故こうなった！と心の中で叫びながら街道を逸れ少し先に見える林に逃げ込むのでした。

8話（後書き）

彼の思考は現代では異端です、平和、平等偽りの理想が覆い隠す真実の一つを叫べば群れを追われます。何故そうなって何が有ったかはいずれ。

何かと不幸や幸運が来るのは主人公補正です、本人はサポートに徹して生きたいと今は思っているのに。

9 話（前書き）

突然のアクセスUPに混乱しながらも嬉しいです。

1章を一部加筆し設定を変え、文章構成も変えてみました。

ランキング入りの効果は大きいですね、評価や感想を頂いた皆様、お気に入り登録をしてくださった方々に少しでも面白い話をお届け出来るように頑張ります。

今後ともよろしく願います。

遅くなりましたが、更新させていただきます。

9 話

息を切らせながらも急いで林の中に逃げ込み、茂みの奥へと身を潜める。

呼吸を整えながらもアルに山賊達の様子を覗う様に頼み姉妹の様子を窺うと、二人ともフラフラと手近に在る木の根元へと力無く座り込んでしまった。

「アル、山賊達の様子はどうか？」と茂みと林の向こう側に注意を注ぐアルに近づき小声で聞くと、

「死んでいる仲間に驚いて足は止まってるよ、でも何人かが周囲の探索に散らばったよ。」と答えた。

どうやら俺達の姿は見られてはいない様で少し安心したが、探索に出てこちらに向って来るであろう山賊達の存在はやっぱりだ。

この林はあまり広くはないし、街のある方向とは逆なのだ。

「街へ逃げたと思ってくれるといいんだけど無理そうかな？」

「無理だろうね」、獣人が何人か居るし直ぐ見つかると思うよ。」

何て事を言うんですかアルさん、聞き耳を立てている姉妹が絶望の表情浮かべてるよ。

「私達はいざとなれば腕輪で逃げればいいから、心配ないって。」

「確かにそうだけど、あの二人は見殺しじゃないか、」

一度助けておいて見殺しにはしたくないんだが、最悪はわが身の安全か。

「でもまだこっちに来る様子はないし、時間はあると思うよ？」

「獣人が居ても解らないものの？」

「誰かさんが派手に血をぶちまけて来たでしょ？血の臭いがきつくて鼻が利いてないみたいだよ、今はね。」

（時間は有る様だし何とか出来ないか考えるしかないか、）

どうやってこの状況を打開するかを考え、警戒はアルにまかせて

思考にふけるが、焦りが邪魔をしてナカナカ良いアイデアが浮かんでこない。

持っているアイテムに役立つ物は無いかと考えるが使えそうに無い、今の俺の能力では無理だと結論づけ、他に何か無いだろうかと思案を巡らす。

顔を上げ周りを見渡し使えるもの、アイデアのきっかけになる様なモノはないかと観察すると、抱き合いお互いを慰めあう姉妹が目についた。

（何とか助けてあげたいんだけどな、彼女達にも聞いてみるか。）
と思い座り込む姉妹の元へ移動し話しかける。

「さっきの話は聞こえてたよね、状況は良く無い、何か良い考えはないかな？」

二人の顔を交互に見て話しかける。

姉のシルビアは何か無いかと考えてくれているようだが、妹のセレナは恐怖と不安に顔に出ており、姉のマントを両手で強く握り締めている。

しばらくしてシルビアが申し訳なさそうに、「ごめんなさい、思いつかないです。」と言い「お二人なら助かるのなら置いて行って貰ってかまいません。」とセレナを抱きしめ頭を撫でながら力強い口調で言い放つ。

「それは最悪最後の手段だから、一緒に逃げ切る方法を諦めないで探そうよ。」

と笑顔で返しはしたが焦りは増すばかりだ。

全員で脱出逃亡できるアイデアが出てこないまま時間だけがすぎる、すると警戒していたアルに動きがあり、俺を手招きして呼ぶ。

「こつちに気付かれた？」

「いや、急に騒がしくなってきたから何か有ったのかも？直ぐ動ける準備だけはして！」

と言つアルの言葉に緊張がはしる。

姉妹にも動く準備をする様にうながし、沈黙と緊張に満ちた時間はとてつもなく長く感じ、精神を削っていく。

「あいつら離れて行くよ、もう大丈夫そうだよ。」と突然声をあげたアルが沈黙を破ると、周囲に満ちていた緊張と恐怖が打ち消された気がする。

「何かあったの、状況わかる？」と聞きアルに説明を求めると、
「山賊達が無かに気付いて騒がしくなった後に街のほうから沢山の人の気配がしてきてね、探索に出た仲間を呼び始めて仲間が戻る前に急いで去って行ったから多分逃げたんだとは思っけど、街から来るのが何かまではわからないよ。」とアルに説明を受け、俺が思いつく事は何個もあった。

大きな街が近くにあり、迷宮もまた近い、そして剣や魔法のある世界で山賊の存在とくれば、騎士団による山賊の討伐が、冒険者による討伐のどちらかだ。

通報したのは迷宮に向う探索者か、通りすがりの行商人あたりだろうか？

何にしても危険が去ったのだ、本当に良かったと思うが、自分の無力さが際立ちイライラと焦りが出るのを感じた。

その後安全が確認でき、姉妹に大丈夫だと報告すると力無く膝からその場に崩れ落ち、顔に安堵んの表情が満ちる。

余裕が出てから姉妹の顔を改めてみると、姉のシルビアは薄い茶色の髪を肩口で切りそろえ、肌は東洋人の様に黄色がかってはいるが顔立ちは彫が深く中東付近で見かけられるような容姿で、目鼻立ちも整い綺麗系の美人さんだ。

妹の方はフードを深く被り良くは判らないが、フードの下から覗く肌は褐色で、鼻は高く唇は薄く姉妹なら姉のシルビアの様にきつと美人なのだろう。

これなら二人が山賊に目を付けられるのにも納得がいく。

何時の時代も世界が変わっても人の欲望には変わりがないだろうし、繁殖と快楽は人を動かす大きな要因だ。

再び沈黙を破るように誰かの腹の虫が鳴き、空気が一斉になごんだ。

どうやら犯人はセレナの様で姉のシルビアの後ろに隠れこちらを窺っている、気付けば正午もまわっているのだから空腹は仕方ないだろう。

笑顔でみんなに「お腹が空いたしお昼にしようか。」と言うと、アルもシルビアもセレナも笑い、短い間だったが困難に立ち向かった仲間として、この姉妹との距離も近くなった様なきがした。

外套の下から食料を入れた皮袋を取り出し、馬車と荷物を失った姉妹にも昼食を振舞う。

和気藹々《わきあいあい》とした空気で昼食の時間は過ぎていった。

食後に姉妹の魔法について話を聞き説明を求めると、旅の目的がこの新しい魔法を広める事であることと、ダークエルフと人とのハーフである妹が受け入れられ安住出来る場所を探す事が目的である事を前置きとしてシルビアが説明し、魔法の説明へとつづく。

新しい魔法の技術は遙かユグランド大陸より東から大陸に渡って来た一人の賢者によってもたらされた技術で、この世界で人族が魔物の脅威を克服し繁栄するために賢者がもたらした広めたいらしい。

（自分と被る目的、東方と言う言葉に一人の賢者、、もしかして同郷の仲間か？）と思い賢者についてシルビアに尋ねるが、賢者は弟子を取り弟子に技術を授けるとこの世を去ったらしく、どのような種族でどの様な人間だったかも分からないらしい。

俺は同郷の仲間であったに違いない、と確信しつつもシルビアに礼をいい話しの先をうながした。

シルビアとセレナの姉妹は賢者の弟子だった男の子孫で、旅をしな

がら技術を広める使命を受けているらしく、親近感が沸いた。

技術は魔力さえあれば多少の適正はあるが習得する事が出来るらしいので、アルも俺も興味がつきない。

荷物を失い困り弱っている所に付け込む様でいい気はしないが、当面の街での滞在費用や生活費を負担し報酬も支払うから俺達にその魔法技術を教えてくれないか？と提案すると、シルビアは「望むものに与えよ」が賢者の方針で「報酬など無くとも教えますよ。」と言ってくれたが、そこは縁があつて知り合つたのだからと強引に説得し援助を受けてくれることになった。

またやる事が増えた・・・、アルは魔法を楽しみにしているように姉妹に色々と質問して乗る気だが、俺の使命である探索者の支援と、憧れの、夢の魔法技術となれば魔法が勝つても仕方ないよね。気持ちは複雑だがこの姉妹としばらく街で行動を共にする事になりました。

日が落ちるまでに街に着いたが懸念していた入り口のチェックは身元証明が無く、税金を一人小銀貨1枚支払えば大丈夫でした。旅慣れた姉妹に宿屋を選んでもらい質素ながら清潔な宿屋で取り合えず一泊することにしました。

費用は朝食付きで一人100Lです、約5000円ならそんなものですかね？

俺達と姉妹で別れ2部屋用意してもらい夕食は俺の持っている食料を分け各自部屋で採ってもらい、朝から色々ありすぎた俺は、装備を外すとベットに倒れ込む。

後の事全てはアルにまかせて眠りに落ちました。

明日起きたらアルのご機嫌が心配です、、許してねアルさん。

9 話（後書き）

異世界ならドラクエやFFの様な魔法が使いたい！作者のエゴでイベントが増えました。

主人公とアルの無双が目に浮かびますが、このお話しメインは製作ですよ？

方向修正しなくて大丈夫ですかね？

ご意見ご感想お待ちします。

10話（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

アクセスが怖いぐらいに増えてビビりながらも更新します。

誰得の入浴シーン？

セクシーシーンは練習中ですので何処かでサービスしますね。

10話

慣れないベットと枕で寝たせいなのか、首の痛みで目を覚ました。木戸が閉められて外の様子は窺い知る事は出来ないが、聞こえる音も無く静かだ。

隣のベットには毛布に包まり、身体を丸めて眠るアルの銀色の髪だけが見え、毛布を規則正しく上下させている。

昨日は部屋に辿り着き夕食を摂ると直ぐに眠ってしまったせいで、街に向う前に振り返り血を拭ったとは言え、洗い流した訳ではないので、血の臭いと体臭がいつもより濃く感じた。

アルを起こさないようにそっと亜空間へ戻るために腕輪を使いベツトから消える。

身体を解すために湯船にお湯を張り、身を沈めると少し熱めのお湯が心地よく大きいため息を吐きコリ固まった首を揉み解す。

一風呂浴びて目が完全に覚まし、魔法の冷蔵庫と化した小さな冷蔵庫から冷えた牛乳を取り出し一気に飲むと、アルに声も掛けずに戻った事を思い出し、飲みかけの牛乳を冷蔵庫に戻し急いでベツトの上へと戻った。

アルはまだ寝ているようで俺は安堵の息を漏らす。

昨日の戦闘で血に汚れた剣と防具の手入れを忘れていたので、手入れの為に装備へ向うと、脱ぎ捨てたはずの装備が綺麗に並べられていて驚く。

（アルがキチンと直してくれたんだなあ、本当に優しく気の付く相棒だ。大事にしなきゃ罰が当たるな。）

そんな事を思いながら装備に手を触れ、綺麗な状態を思い描きながら錬金術を使いメンテナンスを行う。

作業が楽で本当に助かる、状態維持の付与魔術を使わなくても大し

た手間でないの、状態維持以外の付与魔術が使えるようなモノだ。

作業を終え緊張を緩めると視線を感じ振り向く、するとアルが上半身を起こして、こちらをまだ眠そうな目で見ていた。

「おはよう、昨日は直ぐ寝てごめんね、あと装備片付けてくれてありがと。」と声をかける。

「おふあよー、いい氣にしてないし。コウ良く寝れた？」あくびをしながら答えてくれる姿が可愛いと思い、つい頬が弛んでしまう。「眠れたけど、慣れない枕とベッドは身体が痛くなるよね。アルは大丈夫？」と聞き返すと、首を左右に傾けて、手を肩にあて首を回しアルが「うーん、少し凝ってるみたいで痛いかも。」と言うので、

「戻ってお風呂で解してくるといいよ、昨日はお風呂に戻ったの？」と聞くと、「昨日は戻らなかったよ、私も眠かったし、じゃあー私もお風呂に入ってこようかな。」と立ち上がり俺の傍に来ると腕輪に触れアルは消えた。

アルがお風呂から戻ると、木戸から朝日も差込、部屋の外から活発に人の動き回る気配を感じる。

街が動き出す丁度良い時間なのだろう。

ベットに腰掛けながらアルと今日の予定について話合い、その結果午前中でいくつかの用事を済まし、午後から二人で街をユックリ見て廻る事になった。

姉妹から魔法を習うのも明日からにし、今日は姉妹にもユックリ休んでもらおう。

そんな話しをしていると、部屋がノックされ姉のシルビアと一緒に朝食を食べようと呼びに来てくれたので、三人で食堂へむかう。

一階の食堂は冒険者や探索者の宿泊客が多く賑やかに朝食を食べていた、そんな中でフードを目深に被った妹のセレナは既に席に座り

静かに待っていてくれた。

朝食は質素だったがナカナカ美味しく頂けた。

食後のお茶を飲みながら今日の俺達の予定を話し、シルビア達姉妹の予定も確認すると、姉妹は今日は宿でユツクリしたいらしいので、小銀貨を三枚渡し宿泊の延長と必要なモノを買って来ると良いよと伝える。

「こんなには必要ないですよ。」と言われるが旅の荷物を揃え様と思えば足りないぐらいだろう。

「魔法の授業料の前渡しだと思って受け取ってよ。」と言つとしぶしぶだがシルビアは受け取ってくれた。

部屋に戻り、心の中で俺は焦っていたのだ。

理由は簡単だ、今俺の手持ちの硬貨に余裕がないのだ、見栄を張って小銀貨3枚は渡しすぎたか。

金銭的には痛くないが、アイテムや武具を換金しなくてはゆっくりとアルと二人街で遊べないだろう。

女の子と遊ぶにはお金は余裕を持って確保しておきたい、古い考えかも知れないが、男の見栄はこの世界でも張っていたい。

アルには、まずは道具か武器やに寄ってアイテムの相場を確認し、それから売れるものは売って軍資金を作ったら街で遊ぼうと説明して、当初の予定であったギルドでは無く目的地を変えた。

（ギルドで買い取りもあるだろうけど、相場知らないで売るのは無謀すぎるしね。）

出掛ける際に姉妹の部屋へ声を掛け、フロントで宿泊の延長を頼み街へとアルと二人踏み出した。

10話（後書き）

街は遠いです、書きたい事が多いですが削りストーリーを進めよう
と思います。

少しは読みやすくなりましたかね？

11話（前書き）

昨夜投稿した11話が上手くUP出来ていなくて消えてました。

直接投稿はリスクがあるので、書いたらメモ帳に保存しなきゃ！

11話

宿屋の玄関から外に出た先に広がる光景は、圧倒されるほどの活気に満ち溢れた人々の営みに溢れる街並みだった。

街を南北に真っ直ぐ通るメインストリートから道一本奥に入った場所に宿屋はあったが、目の前の光景は多くの人が行き交い喧騒に満ち、馬の様な生き物に引かれた荷台には様々な異世界の食材がうず高く積まれており、動物の嘶く声があちらこちらから聞こえる。

道を行く人達も実に雑多で、髪色も多種多様色鮮やかで、容姿も様々で地球では見られない目の前の光景に感動して足が止まる。

「コウ、どうかした？何か忘れ物でもしたの？」と突然足を止めた俺を心配してアルが声を掛けてくれる。

「いや、大丈夫だよ。街の光景に圧倒されてただけだから。」と通りから視線を外さないで答える。

「本当に活気があって、凄いよね。」アルもこの光景を見て少し圧倒されていたようであった。

宿屋で道具屋や武器防具屋の場所も聞いて来たので、自作のアイテムをいくつか売り現金が欲しい事やアイテムの相場などを知りたいので、まずは道具屋へと向う事にした。

メインストリートに出ると、人の密度がよりいっそう濃くなり、道の両側では露店と屋台が並び、肉や魚、青果などの多種多様なこの世界の食材が並べられている。

呼び込みの大きな声や、人々の会話に作業音が嵐のように渦巻く、初めての異世界の街は活気に満ち溢れたその姿を俺達は見ることが出来た。

街の中央広場には軽食や飲料などの屋台が多く、広場には甘い香

りや香ばしい香りに満ちていて、朝食をとったばかりなのに、つい足を止め食べたくなくなってしまう。

「良い匂いで、お腹が空いてくるね。」

「うん、美味しそうだねー、色々売ってるし午後が楽しみだよ。早く用事終わらせようよコウ。」

とアルも興味深く楽しげに並ぶ露店を見ていた。

「昼食は屋台で色々食べようか、アイテムさえ売ればお金はあるしね好きなモノ食べようね!」

今の手持ちで女の子と街で遊ぶには心もとないし、この世界にはクレジットカードなど無く現金でしか支払は出来ないだろうし、懐に余裕がないと楽しめないし。

円形に広がる街は区画整備がきちりされており、商業地区は東西に伸びる大通りの道筋に集約されている。

中央広場から西側が道具屋や金物屋、商會が立ち並び、人や馬車の行き交いも多くメインストリートにはなかった商人の戦場と言った雰囲気があった。

多くある道具屋の中でも人の出入りが多い比較的大きなお店を見付け、ここが良さそうだと思い店の戸をくぐる。

店内の中は掃除も行き届き、商品の陳列も整然となされており好感を持てた、カウンターも広く、4つの窓口があり、その全てがお客様で埋まっており繁盛している。

カウンターの左端が買い取りカウンターで、その奥の看板にアイテムの名前と買取金額が表示されており、販売価格も明記されており解りやすいと店内を観察して分かった。

親切で気の利いたお店だなあ、現代の商売の感覚と変わらないんじゃないかな。と思いながら、興味深げに店内を見て廻るアルの元に行き、一度店を出て一番大きな道具屋へ向ったが先ほどの店とまったく違い、店内には乱雑に商品が棚に納められ、上の方の棚には埃が厚く溜まっていた、商品も前の店と比べれば少し安いが、なん

だか嫌な感じがする。

結果最初の店の方が信用出来そうなので、一通りのアイテムの相場を確認して店を出て、路地裏で皮袋に売りに出す商品を入れてから最初の道具屋へ戻る。

この店の名前は「旅人の友」と言う数年前に出来たこの町で一番新しいお店らしい、買取カウンターで接客してくれている中年の商人が世間話と共にそう教えてくれた、禿げ上がった頭に小太りで愛想のいい商人だが、笑顔で裏を隠すのが商人なのだから印象に騙されて損しないように気を引き締め買取を依頼する商品をカウンターに並べる。

この世界の便利な所は個人能力で差の出ないスキルが有る所だと思っ、商人だと「鑑定」と「算術」のスキルを取得すると一人前だと言われるらしい。

名前の通り「鑑定」は商品の性能や能力を見抜くスキルであり、贋作や偽物に騙される事はほとんどないし、「算術」スキルはソロバンの練習や数学を極め無くとも脳内で瞬時に計算し答えを出せる。

便利すぎるだろう、不便が少ないと向上心が育たなくなつて進歩や成長が遅くなると思ふのだが、この世界の繁栄や進歩を阻害している一因はスキルに有る様にも思ふ。

脇道に逸れたが、査定が終わり買取金額を提示されるが思つていたより高額だったが、顔には出さずもう少し何とかならないかと交渉を持ちかけ粘つてみる。

交渉の中で興味深い情報も聞けたし、買取金額も4%上乗せ出来たので、此処が折り合いかなと思ひ定時された金額で握手を交わし交渉を終える。

一応は商社マンだったのだ、この世界の商人に負けたくない自分が居るのですよ、でもアルにはセコイとか思わないで欲しいなあ…。

軍資金が12480L（約62万4千円）になりました、中銀貨

は大きくて使いにくそうなので、小銀貨12枚と大銅貨3枚と中銅貨18枚で受け取りました。

アルは交渉中隣で静かに俺達のやり取りを聞いていたので、「交渉中何か気になる事あった？」と聞くと「コウとお店する時の為に勉強してただけだよ、聞いてて面白かったよ。」といい笑顔で答えてくれた。

本当にアルは俺には勿体無い相棒だよ、もう結婚するならアルみたいな子がいいなあ、本当に。と思いアルを見ると「何か顔についてる？」と頬に手を当てていた。

アルは既に「鑑定」の上位の「鑑定眼」と「算術」スキルは取得済みです。

驚く俺に「お店の経営は任せてって言ってたでしょ？」と狼だった頃のアルの発言の意味がやっと理解できました。

興味深い情報とは昨日俺達が襲撃を受けた山賊達の事で、山賊達は最近この辺りの村や街道沿いを荒らしまわっていた山賊団で、王国がギルドに山賊団の討伐を依頼に出して冒険者や探索者を募り、昨日の夜には王国騎士団と共に山賊団を包囲しを殲滅する事に成功したようだ。

自分の予想が当たっていたので少し嬉しかったが、国が動く様な山賊団が相手だったのに助かったのは本当に幸運だったなとしみじみ思う。

道具屋を出て武器防具屋を見るために街の東側へと来た道を戻りながら、アルと露店を冷やかしかし街の雑踏に紛れていく。

11話（後書き）

失ったデーターを思うと凹みますが、何とか書き終えました。
どんな商品をいくらで売ったかは立ち直ったら加筆しますので許してください。

今日もう一話更新する予定です。

12話（前書き）

大勢の皆様読んで頂光栄です。

感想を頂いた方には本当に参考にさせて頂いてます。

楽しみにして下さる方の期待にお答えしたいですが、今の自分では一日一話だと話がどうしても薄くなるように感じてます。

その当りも考えてこの作品を完結させたいです。

今後ともよろしく願います。

金額修正です。

12話

街の東側に続く通りの両側には大小様々な武器屋や防具屋、鍛冶工房が並び、服飾関係の店もある。

東門付近まで一度人の人の流れに乗り店先を冷やかしながら歩き良さをそのな店に当りを付ける。

店先に出ている武器や防具は迷宮でゴブリンが残す様な武器防具がそのまま売られており、材質は青銅や銅、軟鉄の鑄造品で、錆と刃こぼれの有るボロ装備が200L(約1万円)〜1000L(約5万円)で売られていた。

やはり武器は高価な様で、売りに出す武器の評価額に期待が高まる。

店先に並ぶ武器の鑑定をアルに頼み、「掘り出し物が有る様だったから教えて。」と言ってあるが、今のところまったく無いようだ。

まあ、高額な商品は表から見える所には置いては無いかとも思い、鑑定スキルのある世界じゃ見落としも無さそうだしなと考えながら歩く。

小さいが鍛冶工房を兼ねた武器屋に決めその戸を開くと、鉄の匂いと油の匂いで店内は満たされており、右側の壁に多種類の剣が掛けられており、全てが一点づつなので、注文生産の為のサンプルの様だ。

剣の種類に興味が引かれ目が壁に釘付けになる。

剣はグラディウス、ファルシオン、ブロードソードにバスターソード、レイピア、エストックなど地球でのヨーロッパ周辺で使われ発達して来た様な武器はほぼ全て揃っていた。

短剣やダガーは棚にサンプルが置かれていたがその数は少なかった。そんな光景を見ていると製作意欲が刺激されて、直ぐにでも工房に籠り錬金に没頭したくなる。

アルは左側に置かれている剣や槍、短剣などを鑑定しその値段も調

べてくれている様で、お互い店の奥から店主が出て来た事に気が付かなかった。

「おう、良く来たな！どんな武器を探してるんだ？」低くドスの効いた声に振り返ると、身長は130cmほどで身体はがっちりとした筋肉質、禿げ上げた頭に胸に届くぐらいに長い髭のドワーフの親方が実在していた。

鍛冶と魔法の武器と言えばドワーフが造ると言うのが地球での常識だ、そんな存在を目の前にして手を合わせ拜んでしまった。

「おい、おい、何やってるんだい兄ちゃん変わった挨拶だな。」と俺の行動に引いた笑顔でドワーフが言った。

自分の突飛な行動に苦笑いを浮かべながら「俺の故郷の挨拶ですよ、突然声を掛けられたので癖で出ちゃったみたいです。」と必死に誤魔化している俺を見て、アルは口に手を当て顔を背けて肩を揺らし笑いをこらえていた。

気を取り直し、店先から見えた武器が見事だったのでお店に入った事と、来店の目的が武器の購入ではなく鑑定依頼と買取をお願いしたい事を丁寧に伝えると。

「よし、分かった！俺の武器を解かってくれ、褒めてくれたんだ、普段なら鑑定も買い取りもしないが

兄ちゃんも、そっちの御譲ちゃんも良い奴そうだし見せてみな！」と機嫌を良くしたドワーフの親方は言ってくれた。

外套の下に入店前に用意していたボスオークのクレイモアを取り出し、親方に手渡すと大きく目を見開き、切っ先から刀身、鍔、柄と丹念に調べる親方は溜め息と共に言葉を発した。

「見事な業物だな、俺でも此処までの仕上げは出来ん、材質もいい、拵えも申し分ねえ、そしてスキルが付いている。こんな品を本当に手放すのかい？、兄ちゃんは探索者なんだろ？コレは迷宮でのドロップだよな、一体何階層まで潜ってるんだ？」

思いの他のリアクションに驚く、スキルは付いているが付与魔術は施していない品でここまでの好評価だとは思わなかった。

「はい、俺達は探索者です、まだギルドには登録してませんが。」

「お譲ちゃんもか、二人とも良く見れば見かけによらず凄腕って感じだな、それでこれはどんな魔物が持ってたんだ？」

「それは10階層で他のオークを従えた大きなオークからですよ、10階のボスだったのか苦労しましたが何とか倒して手に入れたんですよ。」

「そうか、だがそいつはボスじゃねえな、迷宮のボスは最下層にいるだけだからな、希少種が突然変異だったんだろよソイツは。」運が良いか悪いか分からないな、と大きく笑いながら親方が言い、俺とアルはお互いの顔を見て苦笑いするだけだった。

結果を言えばクレイモアは売れなかった、買ってはやりたいが、買い取る金額を用意すると店が潰れはしないが、廻せなくなっちゃうと親方は申し訳無さそうに言ってくれた。

クレイモアの価値は小金貨3枚は硬いらしい。3000000L(約一億五千万円)……えっと破格のお値段を提示してくれました。

武器の売却はギルドに登録してオークションに出すと言われた。何故こんなに高値が付くかと言えば、「スキル付き」そこ一点になる、スキルストーン自体が高額であり最低でも中金貨が必要な品で、効果によれば小金貨10枚以上付いた事もあるらしい。

スキルストーンってそこまで高いんだ、4つもドロップしたんだけどそんなにレアなんだ、アル情報とこの世界の生の情報とでは微妙に差があるので、実際に話を聞いて検証が必要なようです。

思ったよりスキルを獲るためにはお金が掛かるようなので、売ろうと思っていた7本の武器と防具1点に付与魔術を施し纏めてオークションに出そうかとも思ったが、変に注目を集め街に居れなくなるので

クレイモアだけをオークションへ出し他の装備は様子を見ることに

決め、後でクレイモアに付与魔術で状態維持だけ付けて少し金額の底上げを狙います。

色々予定が狂ってしまい、その上強力な武器を換金する困難さに面倒くさくなったので、予定を早め親方と別れ武器屋を後にした俺はアルと遊ぶ事に決め、多少懐も温まった事を良しとして街に繰り出した。

最悪本物の大金貨が一枚あれば貨幣は在庫の金塊を材料にいくらでも鍊金出来るので俺に焦りはない。

犯罪行為なだけに躊躇しているが、背に腹は代えられない、と思いつか手を染めてしまいたいそうだが。

純粹な能力による収入と割り切ろうかな…。

チートだけとそこまでしていいのか、地球の価値観を引きずり考える俺でした。

12話（後書き）

街で遊ぶコウとアルのお話しは短編で書こうかと考え中です。

設定にちよつと無理がかかってきましたかね？

コウ達が迷宮攻略を進めるヒント閃き暖めてきましたが、被る設定の小説を見付けてしまい再度模索中です。

次回はギルド登録とオークションについてです。

13話（前書き）

更新ですが金額に矛盾を発見！

設定ノートを見直して直ぐ修正するので突っ込まないでください。

13話

街をヘトヘトになるまで遊び倒した俺達は、夕食を済ませシルビア姉妹へお土産を買い戻り、工房で軽く作業し手早くお風呂と洗濯を終わらせ、その日はアルも俺ベツトへ倒れこみ泥の様に眠れました。

本当に疲れていたのかシルビアが朝食に誘いに来たノックの音で目を覚まし、開かない目を擦りながら扉を開けると、心配した表情でシルビアが立っていたので、疲れてたみたいでグッスリ眠っていて今起きた所だと伝えると、表情を少し呆れた顔に変え「心配させないで下さい、何度も呼んだのに返事無くて何かあったのかと心配したんですから！」と怒られた。

ずいぶんと打ち解けてくれた姉のシルビアとは違いセレナは昨日の夜お土産を渡した時も目を合わせてくれず、一言「ありがとう」。

「短く声を聞いたくらいだ。」

今日も食堂は混んで賑やかで、朝食は質素なパンとサラダにスープだったが四人で食べるご飯は美味しかった。

今日の予定を姉妹を加え、食後のお茶を楽しみながら話し合い俺とアルはギルドに登録に行く事を伝え、シルビアとセレナが少し話し合ってから「私達も一緒にしても良いですか？」と言われたので、断る理由も無かったのでアルに視線を向けると頷いてくれたので同行することを了解し、出掛ける準備を各自してフロントの前で集合する事を決め部屋に戻る。

昨日一日この街を歩いたのでギルドの場所もしっかりと覚えていたので、装備を一通りチェックし身を整え、愛剣のファルカタでは目立つので造ったまま放置していた青銅のグラディウスを腕輪から取り出し腰に挿し外套で身を包む。

アルの弓は外套で隠せないし目立つので弓は預かり代わりに迷宮

で手に入れた鍛造のナイフを2本渡しておいた。

準備も終えフロントに向うと既に姉妹が待っていたので、一言謝り合流しギルドへと4人揃い宿を後に向う。

道中は昨日の話をし、特に美味しかった焼き菓子も姉妹にも食べてもらい、行儀が悪いが食べながらギルドまでの道のりを楽しく過ごせた。

この街のギルドは大きく3階建ての石造りの立派なもので、朝から冒険者や探索者が頻繁に出入りしている。

ギルドの戸をくぐると正面には階段があり、左側にはし字の大きなカウンター右側にはバーの様な空間がありテーブルと椅子が並んでいる。

案内板があつたので見ると1階は受付カウンターと酒場で2階は買い取りカウンターと資料室があり、3階はオークション会場があるようだ。

アルも姉妹も興味深げに周囲に見渡していた、そんな三人に声を掛け受付カウンターに向かい職員の女性に話しかけ用件を伝えると、登録は直ぐに出来ギルド会員カードも2時間ほどで発行出来る様なので頼む事にした。

登録内容は氏名と年齢、職業や特殊技能があつたが、特殊技能は空白で出し最後に個人認証の為の触媒として血液の提出を求められた。

それぞれ登録を終える頃には、ギルド内に人の姿は少なく静かだった。

登録を終えたので、オークションへクレイモアを出品するため俺は3階に向かう事にし、アルやシルビア、セレナは2階の資料室に行くことになったので、3人に少し待ってもらい俺は一度ギルドをでて人目の付かない所でクレイモアと剣2本と槍2本を取り出し、ク

レイモア以外を麻袋に放り込み足早に3人の下に戻る。

「アル悪いけど2階の買取カウンターで袋の中の剣と槍を換金しておいてくれるかな。」と袋を渡しアルが了承し、後で酒場で合流することを決めると姉妹を連れて2階へと去って行った。

三階のオークション会場は高級感のある落ち着いた内装でカウンターに職員の男性がいたので用件を伝え、三日後に行われるオークションがあるので出品するのなら手数料を小銀貨1枚払えば大丈夫だと言うことで、小銀貨とクレイモアを渡すと一度鑑定してから必要書類を書いて貰うと言うことだった。

鑑定を待っている間に女性職員がお茶を持って来てくれたので、今度のオークションの出品目録などはないかと聞くと、当日会場受付で入場料と共に一覧をくれるらしいのでその時まで何が出されるのかは分からないようだった。

お茶を飲み終える前に男性が戻って来たのでカウンターへと戻ると、丁寧に鑑定結果を教えてください、剣の鑑定結果と入手先が空白になっている用紙を手渡される。

書類には迷宮で手に入れたことを書きギルドカードの提示を求められたが今日登録してまだカードを貰っていない事を伝えたとギルド側で何とかしてくれるので大丈夫との事だった。

大体の価格を聞くと親方の読みどおり小銀貨3枚からのスタートで6枚は硬いとの事です。

昨夜無理しても付与魔術を施したかいがありましたよ、これで鑑定スキルと素材を十分に買える目処がたちました。

酒場でアル達が戻るのを待ちながら、ちびちびワインを飲み時間を潰していると三人がやってきたので受付に行きカードを受け取り酒場で一息入れる事にした。

四人で話して色々姉妹の事が分かり、すこしセレナとの距離が近づいた気がした。

どうやらシルビアとセレナは俺達と一緒に迷宮に潜り旅の資金を稼ぎたい様でギルドに登録したようです。

セレナが人目を避けているのはダークエルフがこの世界で嫌われているからで、この世界の神々が去った原因を作った女神の眷属であるダークエルフは、ダークエルフの里以外では大陸中であまり喜ばれない存在のようです、耳の形と髪の色、瞳の色がダークエルフの特徴を持つセレナは顔を隠しているようです。

売りに出した武器は4点で小金貨1枚と大銀貨2枚になりました。
(売った武器はCグレード中級の品ばかりでした。)

懐が一気に温まり上機嫌でついお酒を飲み過ぎたのは許してもらいたい。

13話（後書き）

何とか今日中にと思い書きましたが、そろそろ毎日更新は限界かも
しれません。

14話（前書き）

ペースアップして切の良い所まで話を進めます。

14話

ギルドで少々酔いも回り、街の評判の食堂で美味しい昼食を4人で食べ、一度宿に戻る事にし午後からシルビア姉妹から新魔法技術の講習を受ける事になったので、少し休んで急いで酔いを醒ます。戻って直ぐアルは姉妹の部屋で何やら上機嫌に話しこんでいる様なので、男一人では居心地が悪し少しユツクリする事にした。

酔いも醒め頭もスッキリさせたので声を掛けに3人が待つ部屋へと向かい扉の前に立つ。

仲良くなった3人の賑やかな話し声が聞こえた後「どうぞ、入ってください。」とシルビアが扉を開けて迎えてくれた。

姉妹はベットに腰を掛け、アルと俺は椅子に座り向かい合い、改めて新魔法の習得を頼み頭を下げた。

「少しでもこの魔法が広がり人々の生活が豊かにするのが目的ですから、そんなに畏まらないでください。」とシルビアが言い、セレナも頷いて同意を示していた。

「ありがとう、そう言って貰えると嬉よ。」と返し、気を引き締め新魔法についての説明を聞く。

新魔法は今の魔法と違い、現象を発現させる為の方法と手順が根底から異なる。

今の魔法は現象の発現を術者の魔力で満たした空間を広げ囲んだ空間内で、術者が発現する現象をイメージし、満たした魔力に方向性を与え発現場所や規模を指定して発現に至る。

一連の手順が全てマニュアル操作なのに対して、新魔法は発現する現象の場所の指定を最初にした後は威力や現象が術式として込められた魔方陣を術者の魔力で構築し発動させ発現へと至るオートマ操作と言える。

現象の発現までで消費する魔力の消費量が格段に違い、術者による効果も安定している。

今の魔法も悪い所ばかりでなく、術者の腕が直接効果へとつながり状況に合わせた応用も利くが効率が悪い。

そんな説明を聞き、この新魔法を考案した賢者が同郷の出身じゃないかと言う思いを深める。

発想の仕方の違いなんだろうが、省エネルギー高性能で同一規格の考え方は前の世界に溢れていた考え方だ。

その後魔方阵の構成や構成する記号の説明を例を挙げ説明してくれるシルビアの説明は解かりやすく、新たな魔法に関しての理解を進めた。

概要を一通り聞き終わり質問などを繰り返すと夕食の時間となったので、今日は宿の食堂で4人とも一緒に食べることにした。

夕食後に明日は朝食後に街の外に行き今日学んだ概要の復讐と実践を行う事に決めて、今日は解散し明日に備えることとなった。

アルと今日教えて貰った新魔法について感想を話し合い、アルが大きな欠伸をしたのでお風呂を勧め、俺も汗を流し終わるとそのまま寝ることにし一日が終わった。

今朝はスッキリと目を覚ます事が出来た。

初めて使う魔法に心が躍り寝れないかとも思ったが、翌日に胸をときめかせ眠れなくなるような歳ではなくなってしまった様で少し寂しく思うが。

朝食を4人で食べ身支度を終わると街の東門から出て近くの森へと向う、途中昼食になるような物を屋台で購入する事も忘れてはい

ない、パンに野菜と肉を挟んだサンドイッチの様な物と果実を絞った果汁のジュースを皮袋の水筒に各自買っておいた。

道中は何も無く無事に森に着き、奥に進むと少し開けて見通しのよい場所が見つかりここで魔法の実践練習を行う事になった。

「では昨日の復習を行いますね、私が質問するのでコウさんとアルさんで答えて下さいね。」とシルビアが言い今日の講習が始まった。

質問内容は昨日教わった内容で十分に答えられる内容で、俺もアルも難なく答える事が出来た。

「はい、結構です。概要は完璧に理解して戴けてるようで良かったです。」と安堵の表情でシルビアが言いセレナも「二人とも理解が早い…」と小さな声で褒めてくれた。

「では、さっそく実践練習を始めましょう。適正がありますが多分お二人なら大丈夫と思います、魔力の量も十分にお持ちなようですし。」と言い終えるとシルビアは立ち上がり少し距離を取った。

「では、最初は昨日お教えした初級魔法をお見せします。ファイアボールは昨日説明した構成の魔方阵ですのでどの様な魔法か見てください。」と言った後シルビアが手を構え魔方阵を前方に構築し、魔方阵から20cmほどの赤い炎の塊が現れるとシルビアから少し離れた場所にある大きめの岩に向け飛び出し、岩に当たると炎の固まりは弾け岩を包み炎が岩を焦がして消えた。

まさにイメージ通りのファイアボールで、自然とテンションも上がる。

「魔方阵の構成は慣れると眼に見えないような速さで行う事が出来るので頑張ってくださいね。」にこやかにシルビアが言い俺とアルの実践練習が始まった。

俺にはシルビアが付いてくれ、アルにはセレナが付き新魔法の発現までを各工程を一つづつ丁寧に確認し教えてくれた。

結果アルと俺も魔方陣を魔力で構築する所に躓いたがそれ以外の工程では困る事も無くファイアボールを1時間程度でマスターする事ができ、シルビアとセレナを大いに驚かせた。

基礎能力がチートな俺と精霊のアルだから当然の結果と言えるかもしれないが。

「お二人とも素晴らしいですね、一週間は掛かると思っていました及早すぎですよ本当に。」と感心と困惑の見える表情のシルビアが「これでお二人の才能と適正を確認しましたので、後は各魔法の魔方陣の知識を転写させて頂き魔法の伝授は終了です。」と驚きの内容を口にする。

「知識の転写とかもあるんだね、ずいぶん魔法の幅がひろいね。」と驚き動揺の隠せない俺の発言にシルビアが「魔法を効率良く広める為に賢者が編み出された奥義ですから、お二人には転写の魔法はお渡しできませんがそれ以外の全てをお教えますから。」と答えてくれた。

転写は脳に軽くない負担が掛かるそうなので宿に戻りベットで横になり行う事になった。

「ご都合主義と言うか、なんとと言うか順調すぎる新しいスキルの習得が嬉しいような、納得できないような複雑な気分のまま森で昼食を摂り街へと戻る。

街に入る際に支払う税金が少し納得行かなかったのは、あっさり終わってしまった魔法習得のせいに違いない。

シルビアとセレナに貰った魔法知識は一晩の眠れないような頭痛に見合う以上に有用で数も多く、光闇火風水土の6属性の魔法を発動させる魔方陣の知識は魔方陣の構成を組変える事で無限と思われる応用が効く素晴らしい魔法技術の結晶でした。

これは武器に魔方阵を組み込み、魔力を流せば限定付き魔法武器になるんじゃない？とアイデアも湧いたので日を改め実験することを決め、オークションまでの2日は俺、アル、シルビアにセレナと4人で迷宮に探索に出掛け、魔法の実戦戦闘と資金稼ぎを行う事を四人で決めた。

シルビアとセレナにお礼も兼ねて武器と防具を作ろうと工房へ軽く痛む頭をポーションで回復しながら向う。

徹夜すれば朝には完成できるかな？

14話（後書き）

無理がありますがこれで新魔法習得は一区切りです、次回は製作と探索です。

更新も毎日とは行かなくなりますが、書き上げ次第投稿させて頂きます。

読んで下さってる皆様には感謝がつきません。
完結までよろしく願います。

15話（前書き）

2章から大幅に改訂し、イベントを変更する予定です。

1章での設定やキャラのプロットを作り計画的に話を作ろうと思います。

15話

工房に入りシルビア姉妹へと送る装備のアイデアを練るが、候補が多く迷ってなかなか決まらない。

候補を絞る為にシルビアとセレナを思い出しながら考えを進める事にし、二人とも魔法職で非力な女性だから重量の有る装備品は無理であり、遠距離攻撃を主体に戦う二人には中近距離に不安が残る。

盗賊に襲撃されていた時の光景を思い出せば、遠距離の攻撃を上手く防ぎ捌く事が出来れば囲まれ追い詰められる事は無かった様に思える。

色々と考えを巡らし、姉妹の装備が絞られ方向性が決まった。

倉庫で材料を揃え工房に戻る頃には頭痛も治まり、集中しイメージを固めてゆく。

朝までに一揃えは用意出来そうにないので、外套型の防具2点と武器2点、盾1点を造る事に決め作業へと取り掛かる。

まずは外套型防具から取り掛かる、素材は牛革と羊毛の布地にアルミ合金だ、トレンチコート様なデザインで、肩や胸にアルミ合金板を取り付ける事にし、革は補強程度に全体を羊毛生地で作りモスグリーン色に染める。

二人揃いでセレナには大きいかもしれないが、この程度なら何とかなるだろう。

自分達の外套を先に造ったので比較的良い出来と思うが、完成を冷静に見ればトレンチコートにライダージャケットが合わさったような微妙なデザインになった、モスグリーンと言う色が悪いんだろ
うか？

あまり目立たない様に気遣ったのが裏目に出たような気がする。
まあ、でも今二人が着ている綿の服に薄い革の装備よりは防御力は

あるしいかな。

付与は「認識阻害」でターゲットを取られ難くしたし、きっと大丈夫なはずだ。

武器に付与は、あの二人の魔法攻撃があるので後廻しでいいだろう。

武器はシルビアにはヒッターと呼ばれる棒の先に鎖で接がれた棘付きの棒が付いている、ヌンチャクの片方が150cmほどある中距離攻撃の武装にし、硬いハードウッドの柄と鋼の鎖と棘で仕上げる。

付与するなら「衝撃強化」か「筋力上昇」がいいかな？

セレナは小柄でまだ非力だろうから、長物よりナイフや短刀とバックラーと思いデザインを考えるが、知りうる種類でも短刀やナイフはデザインが多く悩んでしまい、先にバックラーを造る事に決め、残り少ないがアルミ合金で軽量ながら大き目の盾にする事にし、直径60cmほどの円形で全体に丸く湾曲した面を持つバックラーが出来たが、余りにも寂しいので、二匹の魚が円に合わせて泳いで居るような彫金を施す。

盾にも付与を施したいが、付与魔術を使うと武器が作れないジレンマに襲われスツキリしない。

無駄に増えた赤色魔石を使い、魔力回復ポーションでも造ろうかと思いたち、深夜のテンションの後押しもあって武器を後回しに倉庫へ向った俺は悪くないはずだ。

鍋に魔石と薬草を入れ錬金すると魔力回復ポーションは簡単に出来たが、素材が悪いのか一本の回復量は少なく、付与と鍛冶錬金をこなせる量は回復しなかった。

気付けば5時過ぎで、武器は諦め盾に「回避能力向上」を付与し仕上げた所で、アルが様子を観に来てくれた。

「調子どう？なんかいっぱい散らかってるけど。」と言われた、確かに作業台の上は鍋や布、金属で溢れかえっていて、苦笑いで「切も良くてさ、丁度終わろうと思ってた所だよ。」と散らかった台の上を整理しはじめつつ、アルに造った装備の鑑定をお願いする。

鑑定の結果は以下だった。

「外套」コートアーマー

グレードD上級

《銘》影：認識阻害レベル中

（じつと動かなければ見逃す程度？）

（防御力＋29 スキルスロットなし）

「武器」スパイク・ヒッター＋

グレードC下級

（攻撃力＋41 スキルスロット＋1）

「盾」軽銀のバックラー

グレードC下級

《銘》燕：回避能力向上＋15%

（防御力＋31 スキルスロットなし）

性能は思ったより出なかったのは、素材よりも俺自身のコンディションが悪かったようだ。

全てC中級程度の性能を目指したのだが、まだまだ未熟なようだ。

基礎レベルも23になり錬金も14と成長している様だが、付与は変わらず2だし。

もっと工房で練習や製作しないと駄目だよな…。

片付けも終わり朝食へ向うが、念のために黄色ポーションと紫色

の魔力回復ポーションを飲み、今日の探索に備える。

結果お腹がタプタプで、朝食はほとんど食べられませんでした。シルビアが俺の体調を心配してくれるのが心苦しくて居心地悪くし
てると、アルが「自業自得ってやつだから、コウが悪い。」と笑って二人に説明し、沈黙の後三人に呆れた表情で溜め息をつかれて何ともシツクリ来ない朝になりました。

（俺ってこんなキャラじゃないのに…）と見上げた天井は薄汚れていてさらに凹む俺がいましたよ。

15話（後書き）

頂いた感想やご指摘感謝してます！

稚拙で未熟な作品ですが読んでいただき感激です。

キャラとイベントをもっと自然な流れでつなげて話を作りたいと思います。

思えば、街を訪問するのが先の方がよくシルビア姉妹はもっと先の登場ですよね。

物語中盤のパワーアップはヒーロー物のテンプレですもんね！

迷宮を探索者とクリアして迷宮や世界に慣れるのを2章にしようかと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8300w/>

迷宮の錬金術商店

2011年10月9日02時07分発行